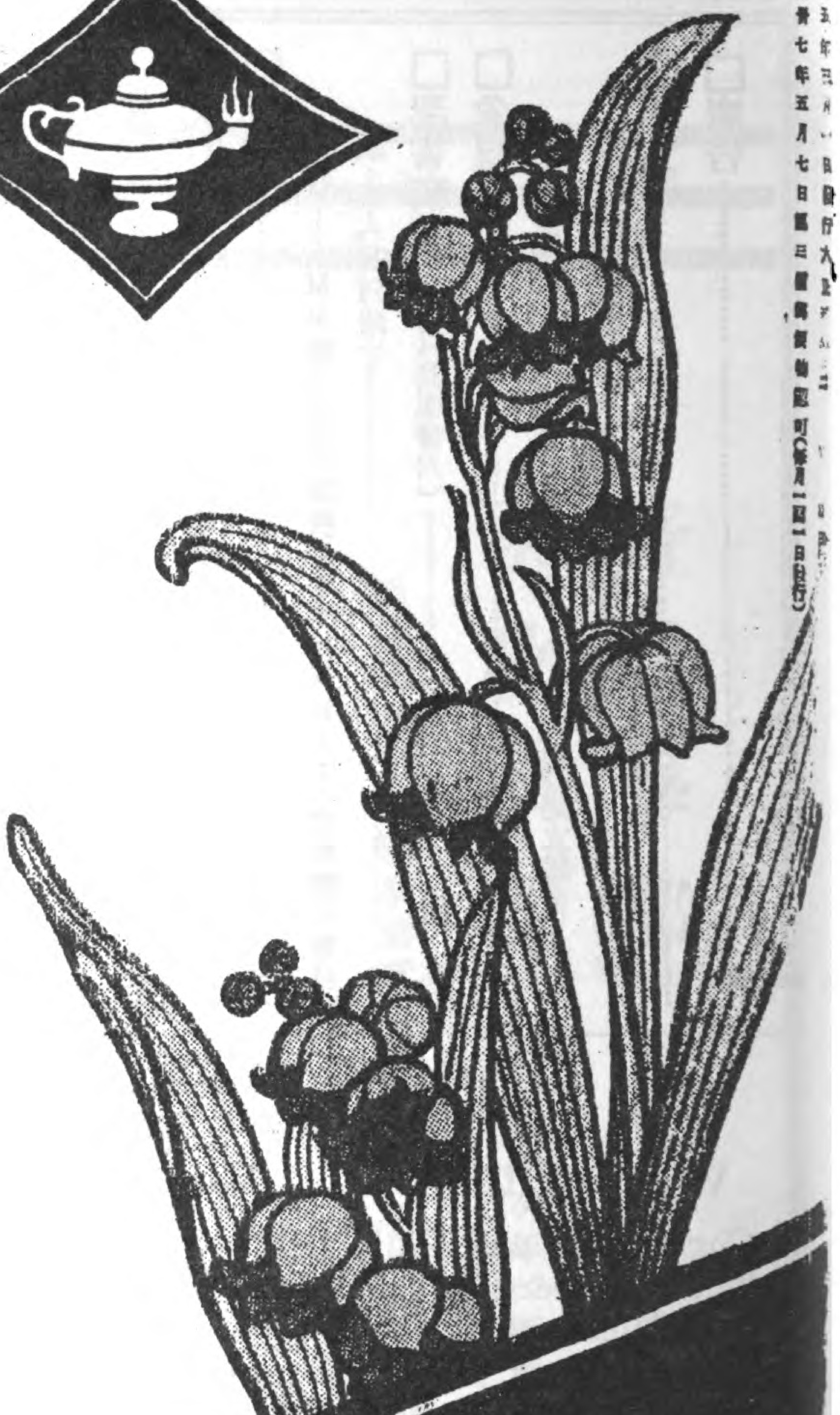
大正五年三月一日發行
明治卅七年五月七日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

女子青年界



第十三巻
第三號

要目

女子青年會第十三巻第三號

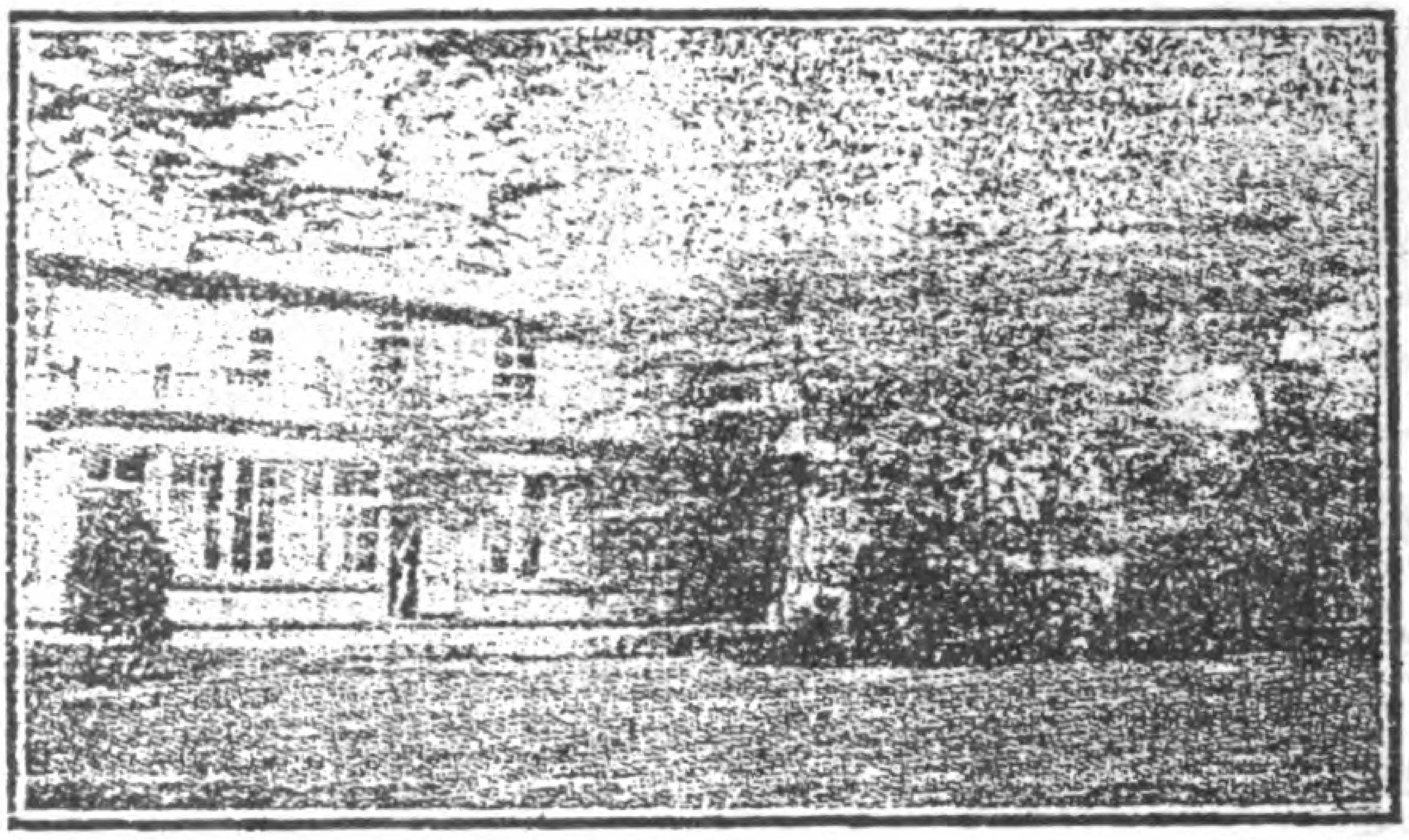
目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume XIII　　March 1916　　Number 3

横濱山手二百九番



□目　的　婦人傳道者の養成。

□入學資格　滿十八歳以上の婦人にして高等女學校卒業（三ケ年以上の程度）の學力を有し所屬敎會主任者の推薦に係り信仰堅實體格優良にして將來實地傳道に適する者。

□修業年限　三個年、其前に半ケ年の考査期あり、通計三個年半に當る。

□入學期　學年は毎年十月に始まれども入學志願者は其以前四月より試驗生として在學考査を要す。

□給　費　考査を經て本入學を許可せられし上、給費を希望する者には相當の方法あり、委細は規則書を見よ。

□規則書　入用の向は二錢郵劵送らるべし。

共立女子神學校

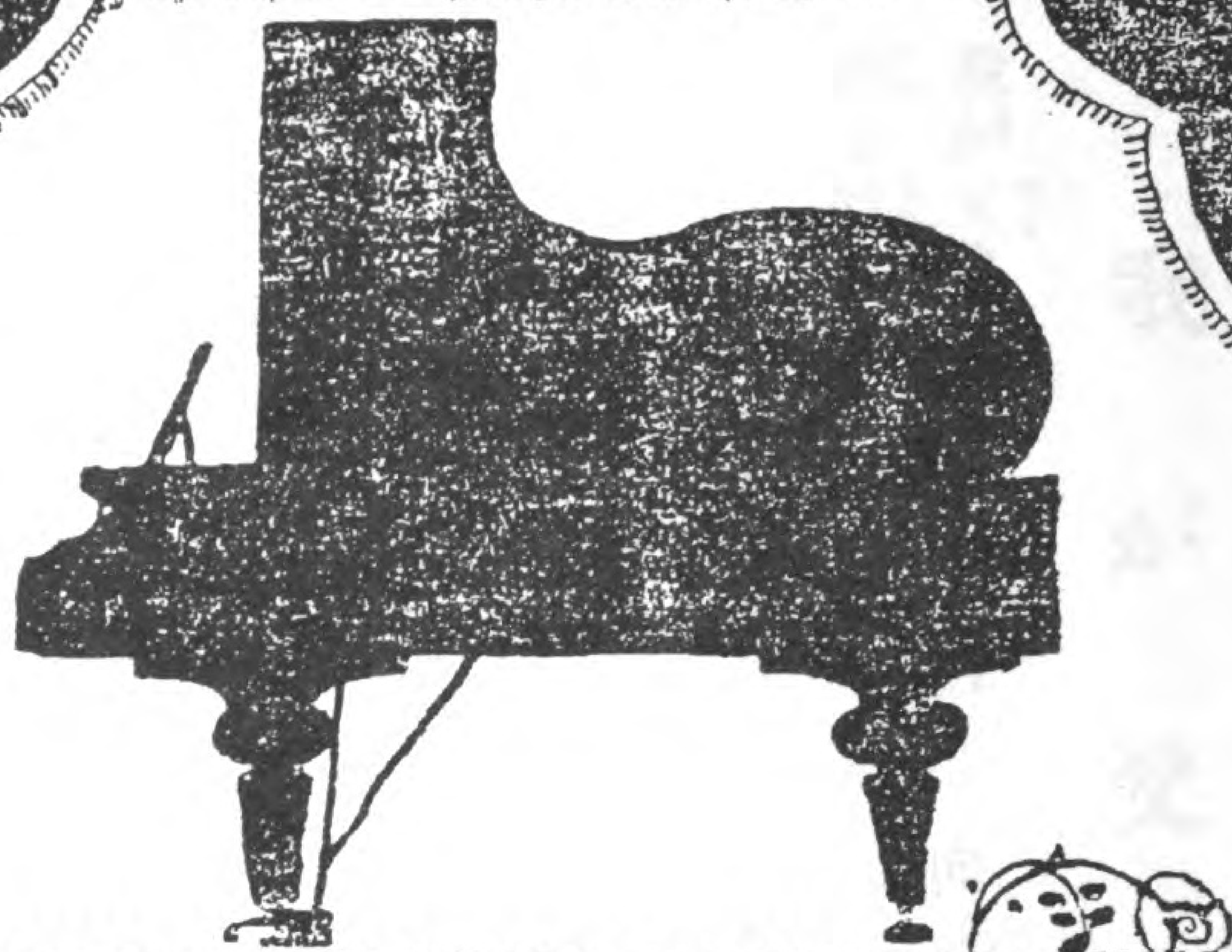
新學年開始四月中旬

横濱
共立女學校生徒募集

山手町二百十二番。高臺眺望絶佳

○尋常科卒業生は無試驗入學許可

○特色。英語、音樂。西洋人五名本邦教師十六名



生徒募集

□本校は婦人傳道志望者を養成す

□四月八日新學年を開始す

□滿十八歲以上にして高等女學校卒業程度の學力を有する者より採用す

□規則入用の向は郵券添附申込まるべし

横濱山手二二一

聖經女學校

女子青年界　第十三巻第参號　（大正五年三月一日發行）

我が父

我が父は我より大なり。　約翰傳一四ノ二八

祈る時は斯くいふべし『天に在す我儕の父よ。　路加傳一一ノ二

我が父即ち爾曹が父、我が神即ち爾曹が神。　約翰傳二〇ノ一七

我これをなすは我の父を愛し且其の命ぜし事に從つて行ふことを世に知らしめん爲なり。　約翰傳一四ノ三一

我父より出でて世に臨れり。　約翰傳一六ノ二八

父と我とは一なり。　約翰傳一〇ノ三〇

父は子を愛して萬物を其の手に授けたり。　約翰傳三ノ三五

これ爾我れに賜ひし所の者に、我永生を與へんが爲、すべての者を制むる權威を我に賜ひたれば也。　約翰傳一七ノ二

主よ、我儕に父を示し給へさらば足れり、イエス彼に曰ひけるはピリポ我斯く久しく爾曹と偕に在りしに未だ我を識らざるか我を見し者は父を見しなり何ぞ父を我に示せといふか、我父に居り父我に居ることを信ぜざるか、我爾曹に語りし言は自ら語りしに非ず我に居る父其の行をなせる也。　約翰傳一四ノ八、九、一〇

父の我を愛し給ふ如く我爾曹を愛す爾曹我れが愛に居れ、若し爾曹我が誡を守らば愛に居らん、我我父の誡を守りて其の愛に居るが如し。　約翰傳一五ノ九、一〇

我儕は父及其子基督と同心也。　約翰壹書一ノ三

會説

基督教と實際生活

長谷川喜多子

キリスト教信者の內には往々基督教と云ふものと自分の日常生活とを別々に考へて居る人があると思ひます。即ち日曜日に教會に行くとか、婦人會に出席するとか云ふ事のみを、基督教だと思ひ、不斷に己れの主義とする處は、基督教に基づかぬ事をして居る人がある、と云ふと可笑しく聞えるが、基督の教へられし事が、其人に十分了解されて居らない、又日々基督に倣ふのが、基督教徒の實際生活であるべきに、其れが少しも顯はれて居ない。唯名のみ信者で、教會の名簿にも名が記載されて居るけれ共、種々の物の見方、解決の仕方等が、基督教を根底に持つて居ない。其一つの顯著な例を擧ぐれば、男子の場合にも、女子の場合にもありますが、其大切な結婚式を擧げる際、其配偶者が基督教信者でないので、わざ／＼日比谷の大神宮などで結婚式を擧げると云ふやうな事がある。

で自分が基督教信者として一生涯貫き通して行く考へであるならば、結婚と云ふ新らしき生涯に入る時などには尚其主義を曲げる筈はないと思ひます、これも私が大變氣が付いて居る事でありますが、若い時に信仰を得た男女で、幸ひ基督教信者の配偶者を得て、新らしき家庭を經營してから後の有樣を見るに、少しも基督教的家庭でない。それは子供が生れても、基督教主義の教育を施なさい、家庭の宗教

が表はれて居ない。即ち家族禮拜や食事前の祈禱などを子供に教へないのであります。勿論全部と云ふのではありませんが、私の友人の間にもこの種の人が多く、信者であるのに基督教の生活をして居ないのであります。歐米の偉人傳を讀んで見ますのに、皆母の膝の上で、主の祈りを聞きおぼえたとか、搖籃の内に舊約聖書の物語りを吹き込まれたのが殘つて居て後日偉人となる土臺になつたと云ふ樣な話を聞きますが、日本ではさうではありません。若き人々の家庭では反對の事實を示して居ります。良き模範的家庭もありますが、概して云へば斯る傾向があると云ひたいのであります。歎はしい事ではありませんか。

基督教は、私共の日々の生活の基礎とならねばなりません。即ち私共が何事をなすにも、神から離れてなす事は出來ぬ筈であります。然し日本の信者の中には、基督教信者の兩親が心を揃へて神の御心を知りたいと力めて、其例を子供に示すと云ふ事が比較的少ないと思ひます。聖書を研究したり教會に出席して禮拜したり説教を聞たりする事は、私共日々の動作、日常の生活に影響を及ぼさなければならぬ筈であります。それが私共の大切なる場合に尙基督教主義にもとつて居る事を信者が平氣で爲なす程、基督教の傳播の妨げをなすものはないと思ひます。『基督我にありて生くる也』と云ふ其精神が教壇に立つ婦人にも、家庭に於て子供を教育する婦人にもあるならば、確かに日本の基督教の教勢は一變するだらうと思ひます。

基督は其教へを麪酵にお喩へになつた事がありますが、確かに基督教信者を通じての教への麪酵は全社會を感化する勢力があるに違いありません。それが出來ないのは基督信者に活ける基督の力のやどつて居ない證據だと思ひます。

願くば私共各信者は我々の生涯の或部分、或は或方面のみが基督教信者で、他の方面はさうでないと云ふやうな矛盾した事は之れを廢し、我々の全生涯

がキリストに擬せられ、其信仰の上に立つて、日常の微細なる處にもキリスト信者たる事を示したいものであります。

基督教女子青年會の活動及其機關（三）

會員誘導部委員の事

（一）目的

基督教女子青年會々員誘導部委員の目的は、勿論新會員を得るにあり。「如何なる會への入會なるか、」又「何のための入會なるか、」はこれ各學生が青年會入會を勸誘されし時、當然發する質問なり。故に會員誘導部の各委員は必ず何故に彼等が新學生の入會を希望するかを熟知し置くべし。

この理由を知る手始めとしての最良法は、女子青年會なるものが何のために組織され、又如何なる目的を有するものなるかを知る事なり。女子青年會々則中に記されたる女子青年會の目的は如何、即ち、「會員相互の間に基督教的性格を涵養し、智識、社交、體育の發達を圖り、一般青年女子の間に基督教を普及し、且彼等を導き耶蘇基督を救主として信ぜしむるに在り。」

由りて基督教信者の學生は協同一致によりて、信者の學生が一層誠實なる、且基督に近き生活を營むやうこれを助け、且他の學生が基督を見出し得るやう、これを導かんと力むるをもつて目的とせる一つの團體に、其助力を與へ得るものなるを知るべし。信者、未信者を問はず、凡ての學生は青年會の諸集會に出席し、又其働、其娛樂に加はる事を得るものなり。然しこの團體はキリスト教主義のものなれば凡ての決議は信者の學生これをなすべし、よりて未信者の學生は選擧權及び役員たるの權利を有せず。

しかしこれを除きては凡て他の正會員と異る處なかるべし。而して女子青年會の目的は、彼等がキリス

ト教信者となるやう、これを導くにある事を忘るべからず。

(二)委員の資格

該部の委員は、青年會と其目的を信ずるものにして、且其目的の善良なる代表者たるべき學生なるべし。されば眞面目なる信仰篤き基督教信者たるは言を俟たず。

種々異れる級より或は學校内の他の團體よりも、其委員を選出するはよし。然る時は委員は同校全生徒に接觸し得ることとなるべし。

(三)委員の職務

會員誘導部委員は學年の終期以前に會合して、其働きにつきての計畫を立つべし。

若し青年會役員總選擧が一月若しくは、二月に行はるゝ時は、同部委員が新學年の初期に於ける働きのため其準備をなし得るは唯短時日の間なり。

先づ其働きを始むるに先立ち特に日本に於ける青年會は、この團體を有する學校以外の學生其他凡ての人々には殆ど其存在さへも知られ居らざるの有様なれば、同部委員が入會勸誘をなすに當り、新入生をして、青年會は如何なるものなるか、又如何なる歴史を有し、これに屬するは如何に誇るに足るべきものなるか等をよく了解せしめん爲、單に其學校の青年會のみならず、他の學校又は他國にある青年會の如何なるものなるかを熟知し置くは、該部委員にとりて大いに必要なる事なり。吾々は實に大なる萬國基督教女子青年會、即ち世界に於ける婦人の最大なる團體の一部なり、よりてこれに屬するは決して無意味の事にあらざるを記憶すべし。

其年の重なる働は自然、新入生の入學せる、第一學期間にあり。然しこの働きは第一學期以前に於て開始せざるべからず。即ち新入生は彼等が未だ其學校に入學せざる以前に歡迎せらるゝ事を得、該部委員は彼等のために其働きをなす事を得べし。

其働の一例を擧ぐれば、會員誘導部委員は既に入學志願書を差出したる入學志望者の姓名を校長若し

くは事務員より聞き置きて其姓名を委員及役員中に分配し置き、各々志望者に歡迎の手紙を書き送るべし。其手紙中には、青年會々員が彼等を歡迎せること、及若し前以て其到着時間等を通知なし置く時は會員がステーションに出迎ふべきこと等を記し置き且ステーションに於て目標となすべき結べるリボン等をも封入し置くを最もよしとす。又出迎への時は委員は新入生の爲に徽章若しくは他の物を目標として着け行くべし。

この新入生を學校に歡迎せし委員が、彼の女の特別なる親友となりて、種々懇ろに其世話し導き助け又出來得る限り、懷郷病或は孤獨の感を起さしめざるやう、之を慰むるは、新入生に對して決して無意味の事にあらず。該部委員の懇切なるは最も大切なる一要件なり、何となれば彼等は其青年會の會員たらん事を望む學生につきては眞に深き趣味を感んずべきを以つてなり、且キリストのために尙一層大切なる事柄なり。然して基督教信者の懇切は吾々の想像以上に、吾々の宗教を證明するものなり。

役員及び他の青年會々員も新入生のためになさるる働の幾分を補佐すべし。即ち新入生を敎師に紹介し、又は校舍、教室等を案內し、或は入舍手續きをなし與ふる事、教科書其他學用品購入の世話をなす等の事なり。

新入生に對する働きの幾分は社交部及宗教部委員の働に屬し居れど、誘導部委員又彼等の計畫に協力する事を得。

新入生の入學後稍々落着きたりと思ふ時、誘導部委員は、其入會勸誘の運動を開始すべし。併し之に先立ちて、委員は周到なる準備をなし置くべし。即ち先づ新入生及古き學生にして未だ會員たらざる者の名簿を作り、之を各々委員に與へ置きて其名簿中に記されたる學生を入會せしむるやう誘導せしむべし。

委員及會員はこれをなすに當り、青年會が如何なるものなるか、又何故入會すべき價値あるものなる

かを熟知し置くべき事を記憶せらるべし。

若し一委員が或學生の入會勸誘に失敗せし時は、他の委員其學生の姓名を取りて、再びこれが誘導を試むべし。決して學生を强制すべからず、今は入會を望まぬ者にも、委員及會員は後日必ず青年會の眞價を證明し得らるべし。

新入會員にはカードにて造りたる會長の署名捺印せる、會員の證を各個に與ふるをよしとす。

この新入生勸誘運動が終りたる後も、其働を終結したりと思ふべからず、尚古き學生をも會員となし得べし。新入會員を得るより尚一層大切なるは青年會及青年會が如何のために組織され居るものなるかに、興味を感ぜしむるやう力むる事なり。依りて若し青年會に對する彼等の興味を失ひたりと思はるゝ學生なる時は、彼等をして再び其興味を恢復せしむるやう力むべし。

該誘導部委員の凡ての任務に於いて、學生等をこの團體の會員となさしむるは、唯會員の目的の一少部分たる事を記憶せらるべし。然して目的の大部分は、學生等を新らたるキリストに歸依せしめ、又は一度信仰を失ひたる者をして、再びキリストに伴ひ歸へる事なり。されば諸姉の日常生活に現はるゝ、自らキリストに對する個人的歸依が、諸姉が學生等をして出席するやう勸め得る集會又は研究の組よりも以上に、彼れらを導くに力あるは疑なし。

稟告

今月は既に各學校卒業期と相成り在各學校會員愛姉方の中には目出度卒業の上故郷に錦を飾り又高等の學業を修めらるゝ方も少なからずと存候へ共今後も本會との關係は變らざる樣相願度自然學校青年會との關係の絕ゆる場合には是非本部の會友(本部直接の會員)となり本會のため一層の御援助を與へられんことを希望仕候間何卒其旨御申越下され度願上候

東京市神田區北神保町十四番地

日本基督教女子青年會本部

團體者の精神

牧師　植村正久

エペソ書四章廿五節より、同五章二十一節參照。

エペソ書四章十七節以下にポーロは、基督を信ずる物は新に造られたる者である事、並に新生命は如何なる性質のものであるか、又これが如何に雄大高潔なるものであるかと云ふ事を説いて居るが、此の二十五節以下には、この新しき生命は唯一人々々の爲でない、即ち個人的のものではない、團體的のものである事を記述して居る。

先づ初めに、凡て基督を信ずる者は、唯自分と神の間がよくなればそれで充分である、神と我と神秘的の契を結びて、餘念なく信仰生活をして行く、或は修道院にでも入つた如く、唯一人の信仰さへ守もつて行けばよいとして、或は教會を蔑し、或は信仰團體を輕んずるやうでは、眞に基督を信ずるものとは云はれない、恰度この讃美歌二百七十五番に見える如く、今も昔も皆共に軍隊のやうに一團體となつて進行く、これがキリストの精神である。一人で進むのでもなければ、一人で守るのでもない、團體を造つて行く、即ち「われら互ひに肢なればなり。」恰度四肢百體、いろ〳〵に分かれて居るが、しかも我々の肉體は矢張り一つの體をなして居つて、皆有機體の關係を有して居る。それと同じく基督教は團體的兄弟と云ふ精神を尊重する、これを外にしては基督教でない、基督教程共に集り、共に禮拜し、共に歌ふことを尊ぶ教はない、此れキリスト教の眞面目である、かゝる深き關係が、信徒同志の間にあるこれがため眞實を云はねばならない、團體の內には一體正直にして欺かざるの心持が充滿して居らねば

成立しない、必ず瓦解するのである。團體の精神は正直、僞り飾らざるの精神である。『われら互に肢たればなり。』これがキリスト敎の精神である、互に僞を云はず、誠實を重んずる、吾々は一つの團體に屬して居るものであるから、僞があつてはならない。此の四章二十六節以下を讀めば、種々吾が同じ團體にありて兄弟姉妹として互に注意すべき事が擧げてある。或は怒る事を愼む、これ矢張り團體に於て最も大切な一箇條である。又、『竊をする者、復ぬすみを爲す勿れ、寧ろ貧しき者に施さんために勵みて手づから善工をなすべし』と云つてある。『竊み』と云へば非常に激烈な言葉であるが、無論嚴しく考ふべき事である。即ち例へば他人の財産所有物を利用する又正しき道を踏ずして、不當の利益を貪る、其他法律上の罪には問はれずとも、尚多くこの『竊み』に類する事をして居る。吾々がかうして居る間にも注意しなければならぬ事がある。『竊む』とは餘りに激烈である、斯る事は毛頭吾々の間には有り得べからざる事であると思ふならば、それは大いなる誤謬である、無暗に他人に厄介を掛け、或は無暗に人の世話になる事を喜んだり、又は無暗に人の尻馬に乘る等種々の事があるだらうと思ふ、凡て正しき道に適はざる利益を貪ぼる事はこれに屬するのである。基督を信ずる者は、其團體内に健全な生命を全うするに何か貢献する處あらん事を希ふて『寧ろ……善工をなすべし』とある如く何の其爲に盡すべきである。消極的に人の厄介になり、無暗に他人の世話になり或はよい氣になつて惰けて居るやうな事なく、積極的に自ら勵む事が肝要である。其他、『汚れたる言を汝らの口より出すこと勿れ……』など種々大切なる事が述べられてあるが、新しき生命を得た處の者は豫ねてより注意し、且吾々は一つの木の枝兄弟である事を常に記憶して居らねばならぬ。

次に三十節に『神の聖靈をして憂しむること勿れ……』とある。このキリストを信ずる者の團體其仲間を結び付けて居るセメントの如き力、これが即ち

神の聖靈である。神の聖靈が同じ信仰を持つて居る團體の內に漲ぎる、恰度一軒の家で申しますならば慈愛の深い母親が、其家の親睦一致協同の力、これを結ぶ處の鎖、即ち繼ぎとなつて居るのと同じである、そして若し子供等が兄弟喧嘩をするとか、或は何か其間が治まらぬ樣な時には如何に其の母が心配し又心を傷めるか、實に胸を裂かれる樣な感じをするであらう、それと同樣に敎會に於て、この團體は眞實を尊び、眞實がなければ立ち行かない、又實に自ら力を盡すべきであるのに、若し兄弟姉妹が其道に背き、凡ての事を他人に委かせて手を拱いて居るなどの『竊み』に近いやうな事があれば、神の聖靈が非常に憂ふる、恰度母親が其子供の不始末、仲の惡い時、又は兄弟同志が互ひに助け合ふ精神のない時には、實に其身の切らるゝやうに苦しく思ふと同じで、神の聖靈が斯る場合には憂ふるのである。『神の聖靈をして憂へしむる勿れ』神の聖靈は憂ふるもので、これに背くものは恰度子が不孝をして親を泣かせると同樣なものである。よつて深き且熱烈な信仰を以つて聖靈を信じ、何か宜しからざる、道に背きし事をなす時は、神の聖靈が嘆き憂ふるものである事を記憶せねばならぬ。キリスト敎信者の團體として、其生命を保ち、其道を修めて行くには、種々注意すべき事があるか、最も大切なる事、即ちこの團體の精神の鎖である神の聖靈を憂へしめざる事を心掛くべきである。

次には、『互に仁慈を憐恤あるべし。……』(三十二節)とある如く、團體の生活、新らしき生命を、我々が全うして行くに就きて心掛くべき事は、神の仁慈深い、寛仁大度であらせらるゝに倣ふべき事である。吾々が屬して居る其團體の繼ぎである、神の聖靈を憂へしめてはならないと共に、極めて高き處に標準を置いて、神の慈愛に富み、寛大雅量で居らさらるゝ如く、吾々も人を赦す、即ち『キリストに在りて神汝らを赦し給へる如く、汝曹も互に赦すべし。』と云ふ言葉の如く、この寛容な忍耐深き心がな

ければならない。そして『汝等愛せらるゝ兒女の如く神に倣ふべし……』とポーロは愈々委しく此の意味を説いて居る、吾々は神に倣はねばならぬ、このキリスト教の道德は、神に倣ふと云ふ事になると、必ず直ぐに、キリスト吾等を愛し十字架にかゝりし如くと云ふ事になるが、常日頃からこの心を持つて居る事が大切である。又この後の方に種々肝要なる事を懇々と教へて居る、これ等を一つ〳〵委しく説明する時には非常に長くなるが、然しこの多くの記されて居る事の中に、特に四つばかりの御注意を願ひたい事がある。

第一『機を窺ふべし、是時惡しければ也』(十六節)機を買ひ占むべしと云ふ事である、買占める、丁度商人が、市場の樣子を見て多くの商品を買占め、多大の利益を得るやうに、キリストを信ずる者が、絶へず神の御榮を現はす、神の國を擴める、人の德を建てる、又自ら信仰生活を全うするに、恰かも常に商人が拔目なく、機敏に物を買い占めるやうにせねばならぬ。吾々は折々呆然として迂濶なるがため、大なる儲けを失ひて、一生涯貧乏で終るのである。嘗て日露戰爭の時に、某伯爵が、斯る時に三十萬圓位儲けない奴は馬鹿だと云つたさうであるが、この伯爵の儲け方は果して善いか惡いかは知らないが、兎も角機會があるのに儲けずして貧乏で終る馬鹿者が經濟界にも多くあるが、精神界にも亦この種の者が多く居る。即ち桔据奮發して立つべき時を忘れて立たないで居る、それがため大なる損失を招いて居る。『是時惡しければ也』と即ち其時機が惡いと云つて居る。キリスト教の黃金時代は昔で、それに比ぶれば今は惡いと云ふのではない、唯現在の惡い事のみを痛切に感んずるのである。ローマの政治と日本の政治と何れがいゝかと云ふ如く比較しての事ではない、現在の惡しき事を感んずるのはキリスト教である。益々奮ひ立つて、善を以て惡に勝つ、如何にしても救はねばやまぬと、其改革にかゝるのは、基督教である。キャプテン、ビックルと云ふ人が或る

日本の田舍で、非常に風俗紊亂して居る事實を發表しこれをある英字新聞にも掲載した事があるが、これを見た時實に冷汗を流したことであつた、今始めてかゝる事を聞いたのではないが、かく發表されれば、愈々機を買ひ占め、精神的の買占をせねばならぬと云ふ事を切實に感ずるのである。

第二『主の旨は如何と識る』(十七章)のである。何處に神の旨があるか、吾々をして何をなさしめんとして居らるゝか、これを識得する事が大切である。

第三は『酒に醉ふこと勿れ……、宜しく靈に滿さるべし』と云ふ事で、此處で酒と聖靈とを較べて居る、酒は仲間同志が集りてこれを飮めば機嫌よくなる、又元氣をつける喜びを與へ氣力をつけるものである。依つて同樣に神の靈にみたされる。團體の精神が充ち〳〵て上機嫌になる。喜びに滿ちて氣力溢るゝやうになる、どうも今日の如く寐入つた狀態、實に浮かない狀態ではよくない、かゝる狀態にある時、堅い信仰を有しないものはどうだ一ぱいやらうと云ふ事にある、今日の吾々の教會の狀態を見るにどうも浮かない、力あるも入らない有樣で、不機嫌にて勇み立つて居ない、かゝる時『酒に醉ふなかれ……又うたいて爾曹の心に主を讃美すべし。』どうか我々の内に聖靈によりて浮き立つやうな精神狀態にしたいと思ふ。然し斯く精神狀態が浮き立つてのみ來る時は、天狗になり易い傾向がある。即ち人を裁く、人の信仰の薄い事を無暗に擧げて、これを裁判する、自分のみが一人立派な者であるとの自負心を起し、種々の弊害が發生する。依つて、第四に『キリストを畏るゝ心を以て互に服ふべし』である。キリストの意を意として、熱心と秩序とが誤まられないやうにする。或る兄弟が餘り熱心なるによつて其の結果他の人に信仰がないやうに見えて、まどろしく感んずるやうになりやすい、依つて秩序を重んじ人に從ふ事を忘れてはならない。即ち第一に機會を占め、第二に主の聖旨を知り、第三聖靈に充たされ、第四に忍びて人に服ひ秩序を重ずる氣風を養ふ、これが殊に注意を要すべき點である。(文責在記者)

力の秘密

牧師　小崎弘道

扨私の題は『力の秘密と云ふのでありますが、基督教の特色と云ふべきものが幾つもある。思想上にも又倫理上にも、宗教意識の働きにもあるが、しかし其大なる特色の一つは、力の宗教である事であらうと思ふ。様々の宗教中にても、基督教は力の宗教と云ひ得らるゝ、ポーロがテサロニケ人に送りし書翰に言ひし言葉に『我等の福音なんぢらに來りしは只言に由りてのみならず、能により聖靈により、又篤き信仰によりてなり』とあります。彼れは特に三つの特色を擧げて居ります、第一力で、第二は聖靈であると云つて居る、この二つの區別は如何に云へばよく分るかと云ふに、第一の力は結果で、第二の聖靈は原因である。第三は篤き信仰、なま溫い信仰でなく、熱烈にて燃えるやうな信仰である。ポーロはこれがテサロニケに基督教が傳はつた時の特色であると云つて居るが、實に使徒時代の基督教は力であつた、ポーロが又羅馬人に云つた言葉に、『我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人すべて信ずる者を救はんとの神の大能たれば也とある。當時ローマは世界の中心で學者も多く、有力なる大政治家も又立派な人物も多く、集つて居て、凡てのものの中心であつた。かゝる世界の大都會の人々に、パレスチナの田舍に居たポーロが、われは耻しくないと云ひ贈つた、何故であるか、即ちユダヤ人をもギリシヤ人をも救ふ事の出來る神の力であるから耻とせずにこれを傳へると云つて居る、

又ポーロがコリンタの人々に書き贈りし書翰の中にも『兄弟よ我曩に爾曹に到りし時も言葉と智慧の美しきを以てなんぢらに神の證を傳へざりき』「唯この靈と能との證』を用ひた。そして其理由は『汝等の信仰をして人の智慧によらず、神の能に由らしめんと欲へばなり。』と云つて居る。ポーロは基督の教は力の教である事を特色とせしのみならず、且力の教なるが故にこれを傳へる事を恥とせず、又この上に信仰を置く事を希望した。

世間の人が近頃はやれオイケンの哲學、やれタゴールの自然觀だなどと騒いで居るが、皆多くキリストと類似の點を持つて居る、そして人々はこれらが世に持てはやされて居れば、高尙な新思想だと云つては、これを信ずる、又稍々この思想の勢力が衰へて、他の新思想が起る時には、又これを捨てゝ他を信ずると云つた風に絶へず風のまに〳〵變化して行く此のやうではいけない、一種の力人間以上の或る力の上に信仰の根據を据えて置かなければ信仰を持つ人間として立ち行く事は出來ない。これはポーロの教へた事であるが、キリストによるも同一である。バプテスマのヨハネが『天國は近づけり、悔ひ改めよ』と絶叫してキリストの前に行つて基督の證を立てたるが、何を其土臺としたと云ふに『われは彼れの靴の紐を解くるも足らぬ者なり』といつて居る、エスは斯く尊い、その理由は自分は水で洗禮を授けるが、エスは力を有せらるゝ自分になき能がある即ち、力と聖靈と火の洗禮を施す。これが何人にも立ち優つて、救主たるの所以である。よりて吾々は信じなければならないと、ヨハネは證をした。

私共が聖書を讀んで見ますのに、エスが教へをせらるゝ時、又説教をなさる時、其教へが珍らしいとか高尙で森嚴な教へであるとか云つて、當時の人が感服したのではない。皆が驚きあやしんだのは、其の中にある能であつた。例せば、エスが山上に於て説教せられし後、マタイ傳の記者は『集りたる人々其教を駭きあへり』と書いて居ります。エスの教

は嶄新奇拔或は高尙な教であつたと云ふのではない『學者の如くならず、權威を持てる者の如く教へたまへば也。』と云つて居ります。即ち彼等が感服し、動かされたのはこの能によるのである。又同じ様な處であるが、馬可傳第一章二十四節以下を播いて見れば、カペナウンの教會にて『會衆皆驚き相問ふて曰ひけるは、是何事ぞや是如何なる新らしき教ぞや、汚れたる鬼さへ權威をもて命じければ從へり』と。又其時鬼につかれたる者が叫んで云ふに、『我儕は爾と何の關はり有らんや、爾來りて我を滅すか』云々とあります。『これ何と新らしき教であるか、こは如何なる教ぞや、』鬼さへ出て行けり、と云つて驚歎した。世の人の持つて居ない一種の力、新らしい力が其の内にあるのを見て、皆感動された。これキリストの教の特色は力である所以である。此力は人を罪惡より救ふ力である。ポーロが云つた如く、『ユダヤ人をはじめとしてギリシヤ人をも救ふ神の力』である。如何なる大罪を犯した人も、一旦この能に觸れる時は、忽ちに潔められ、忽ちに救はれる事の出來る一種の力、何處にも見出す事の出來ぬ力である。又自分も經驗すれば、他人も經驗する事の出來る力である。又これは眞の平安、眞の安心を與ふる力である。新聞紙を見れば毎日々々思ひ煩ふて自殺をする人が多數ある。これは即ち其心に平安がないからである。金がないためであるかといへば必しもそれには限らない、貧しき者と雖も自殺をしない、子供がないからであるかといへば、またさうとも限らない子供を有する人も又煩悶して居る。慰安は境遇によるにあらず、神と近づき一所になる時に、始めて眞の慰安と安心が得らるるのである。私共にはあらゆる敵が四圍を圍んで居る、誘惑、困難、死と云ふやうな敵があるが、これに打勝つて、平安を得て行くには、神の力、キリストの力による外はない。

キリストを信ずる人にも又、これを研究する人にも、力とは何か、如何にすれば此の力を得る事が出來るかと云ふ問題に考へ及ぼすのは當然の事である。

依つて力の秘密と云ふ事になるが、兎も角人間には解せられぬ不可思議な力である。有形な力でも、力とは如何なる物かと考へて見れば分らない。エネルギーとは何か。今日科學の進步は目醒しいもので、其結果蒸氣の力、電氣の力、水の力等種々の力が發見され、利用されて居るが、斯く科學の發達せる今日に於ても、尙所謂一つの不滅なもの、限りなくある無盡の力によるもので、それが唯種々に變化するによりて、別れるのであると云ふ事が是認されて居る。又この力は何によるかと云ふに、見る事の出來ない人格の力、神の力が物質にあらはれたものである。天地萬物を動かす力も其源を質せば、天の意志によるものであると說明されて居る。なほ又靈的の力無形の力と云ふものが存在して居るが、これは何になるものであるかと云ふに、有形の力が神の意志によるものであるならば、無形の力はより以上に神の力である。聖靈の力とは卽ち神の力である。聖書には種々記されて居る。卽ち、上よりの力、神の力又ユダヤ人をはじめギリシャ人をも救ふ神の能とある。此能にさへ充ちて居るならば、私共が罪惡に打ち勝てるは無論の事、如何なる心配辛苦があつてもこれに負ける事はない。又如何なる計畫をしても、實行する事が出來る。傳道などは特にこの力のあらはれたものである。依つて何百人、何千人と云ふ人が一時に悔ひ改め、其罪の生涯より脫してエスを信じて救はれるのである。ペンテコステの日に使徒行傳には、五千人のものが救はれたと記されてあるが其の時は聖靈が下つたからで、其時代であつたから、かゝる事が出來たと云ふにあらず、今日に於ても尙あり得べき事である。實際大勢の者が悔い改めて居る。又米國などに於て、大說敎會が開かれる場合には大勢が救はれる。又禁酒運動など、どうして人力でかゝる事が出來るかと思はれるやうな事が遂行されて居る。卽ち合衆國の或る州では該運動の結果、從來自由に許せし酒屋を全然許さぬと云ふ事になつたのである。これがため精神的のみならず、商業上

にも信ぜそうもない利益が與へられて居るさうである。

今日日本の牧師に、この神の力が與へられたならば國民七千萬人を救ふは、實に容易の事である。皆がこの力を受け度いと希望するのは當然の事である。ペテロがサマリヤに傳道せる時、其地にて主のバプテスマを受けたる人々の上に其手を按き、祈りければ彼等に聖靈が下り別人となつた、これを見て居た魔法使のシモンと云ふ人が、金を携へ來つて其力を買い度いと云つた。ペテロは其不心得を叱り、シモンは遂に悔い改めたと使徒行傳に記されて居りますが、若しこの力が容易に得らるゝものであれば斯る誤つた考へを持つかもしれない。

然らばこの力は何によりて得らるゝか、即ち祈禱によりてである。祈禱は全能である。眞心から祈るならば何事も出來ない事はない、或る時エスが弟子と共に山に行き三人の弟子のみ伴つて他は其麓に殘して、奥深く行きし時、其留守中に或る人惡鬼に憑かれたる子供をつれ來りて鬼を追ひ出さん事を弟子達に願つたが、弟子達は如何にしても出來ない、山から下りて來られたエスがこれを追い出されたので。これを見て居た弟子達が、何故私共には追い出す事が出來なかつたのであるかと尋ねた時、エスは祈禱と斷念によらざれば出來ないと答へられた。確かに祈るならば出來ない事はない、身を賭して祈るならば、力の與へらるる事は明白である。

併し私共は唯祈るのみで、この能が與へらるゝと思つては誤である、祈る事は誰でもして居る、心の底から眞心こめて眞面目に祈つて居るかと云へば、あやしいが、兎も角祈りはしてをる、然かるにこの能の與へられないのは何故であるか。即ち神と和ぐ事をして居ないからである。神の考へ給ふ事を考へ、爲し給ふ事を爲すにあらざれば、此力は得られない、電氣は其處に存在してをつても硝子や瀬戸物では傳はらない、金屬性のものがなければ傳はらないと同様、私共は神と同じ者、似たものと成らなげ

ればならぬ。この神と似たものになると云ふ事が、能を受ける上に於て最も必要なる條件である。イスラエルの民がヨシアに導かれて、ヨルダン川を將に渡らんとせる時、どうして渡つたか、舟を作つて渡つたか、先達てもフランスから歸つた人の話にライン川を渡るに、この川を敵軍襲撃に對する防備のため橋を皆破壞したので、其代りに鐵製の平坦な船を並べて、其上にレールを敷いてあるさうでありますが、併し幾千年の昔に於ては思ひも寄らぬ事である。然らば何によつて渡つたのであるか、即ち神の力に依つたのである。ヨシアはヨルダン川を渡るに先立ち、民を集めて『汝ら身を潔めよ、エホバ明日汝らの中に妙なる事を行ひ給ふべし』と云ひまかせた神の力、不思議なる力が現はるゝには、神と同じ心持ちにならねばならぬ。祈る前に先づ神と和ぐ事が大切である。併し神と和ぐ前に人と和ぐべし。エスは『先づ兄弟と和らぎて後、供物を神に捧げよ』と云つて居られる。私共は一人の小さき者とも和ぐ事が肝要である。

此神の能の現るゝ處に一方より考へて見れば、不思議な事がある、即ち、バプテスマのヨハネが、我は水を持て洗禮を施せどもエスは火と聖靈をもて洗禮を施すと云つたに不拘ず、エスが十字架にかゝりて後、はじめて力が現はれたと云ふ事である。エスがヨハネ傳に『我を信ずる者は其腹より活る水川の如くに流出づべし』と節筵の時に云つて居らるゝが記者が云ふに、此の如くいへるは彼れを信ずる者の受んとする靈を指せる成蓋イエス未だ崇を受けざるに因りて靈いまだ降ざればなり』と。かのペンテコステの日は、エスが十字架にかゝり死して復活り給ふてより後、丁度五十四日目に來たのである、此處には深い意味が含まれて居る、即ちこれにより、神の力の現るゝ根據は十字架である事がわかる。人間から云へば、其心が潔めらるゝにあつて、神から云へば十字架に存するのである。

如何にしてこの能が今日吾々に與へらるゝか、今

日は幸ひに、キリストが十字架にかゝり死して甦り給ふたのであるから、我々が靈を受ける要件は備つて居る、されはこれを受けるには、唯吾々が悔ひ改めて、神と同じ心になり、エスの喜び給ふ事を喜び憂ひ給ふ事を憂ふ、苦しみ給ふ時に共に苦しむと云つたやうに、同じきものになつて眞心より祈る時、其祈禱は、全能の力を與へる、これ私共の光榮とする處である。「その後われ吾靈を一切の人に注かん、汝らの男子女子は預言せん」云々と約耳書に記されて居るが、これはエスが十字架に懸られた後にある事を云つたものである。私共には最早や既に十字架が與へられて居りますから、私共に未だ力の與へられて居ないのは、私共の罪によるのである、依りて先づ神と和らぎ、祈つて神の力を受けるやうにしたいものであります。（修養會講演梗概）

思出のまゝ

松宮生

▲此頃高等女學校生徒の服裝に就ての問題が持ち上つて居る。現に大阪府下の各高等女學校では申合せの上、生徒の服裝を齊一にするばかりでなく、髮の結方までも一定するやうになつたといふ事である。それが大阪ばかりでなく、東京でも地方でも女學校當事者乃至女子教育家の間に研究問題となつて、一定するの可否が議せられるやうになり、既に校服を制定するやうに決した女學校もあれば、又目下協議中の女學校も尠なくない様子である。

▲元來此の服裝一定問題は十數年前からの問題で、最早生徒に上羽織式のものを着用せしめて、外裝の齊一を實行して居る女學校もある位で、決して今日に始まつた新問題ではないが、しかも即座にこれを一定するの可否を斷定せんとすることは決して容易の業ではないと思ふ。そして服裝一定論者の側から

言へば、服裝の齊一は學生の風儀を維持する上に於て、又學生に質素の美風を養成する上に於て、其の必要を認めるといふやうな理由があるのであらうが勿論私共といへどもこれに對しては益なき事として一概に否定し去るべき理由を有たぬ。

▲しかし服裝の齊一が果して服裝一定論者乃至女子敎育當事者の希望又は所期に對して滿足なる結果を齎し來るべきかといへば、それは實に疑問中の疑問といはねばならぬ。私共の見る所では學生の風儀を維持し質實勤儉の美德を養成するには服裝問題などよりも更らに大切なものがあることを信じて居る。即ち彼等に活ける生命を與へなければならない。此の生命は髮容の一定又は形式の末から來るものではない。然るに今日の女子敎育者が兎角に此の大切なるものを閑却して徒らに形式的方面に沒頭し、やれ服裝だの、やれ髮の結方だのと僅に末葉の問題にのみ腐心しつゝある傾向の見えるのは、全然贊成の出來ないことである。同時に現今女子敎育界の不振荒廢の狀態にあるも亦茲に素因せるを疑はない。

▲此頃また嫁と姑との問題が持ち上つて居る。これこそ眞に舊い問題であるが、今日の如くに喧しくなつて見ると、また多少新問題であるかのやうな感もないでもない。しかし幾ら喧しく議論して見ても、嫁は嫁として姑は姑として各其の本分を自覺して互に克己忍耐して讓合ふやうにする事の外に實地の解決を着ける方法も手段もあるまいと思ふ。此は嫁と姑との間柄ばかりでない、人と人との圓滿なる關係はすべてこれに依つて維持されて居るのである。換言すれば此の根本の一事を除外して嫁と姑との問題を解決せんとするならば、恰も源の濁れを忘れて末流の淸きを求むるに近い。

▲嫁は絕對に姑に服從すべきものとの祖先傳來の謬說を楯にして嫁を酷めんとする姑があらば、それは勿論沙汰の限りである。しかし若し姑に對し絕對服從するの理由がないといふを理由として姑に反逆を企つる嫁があるとすれば是亦嫁酷めの姑と何等撰ぶ

所がないといはねばならぬ。斯くの如くにして互に其の主張を高め來らば、假令絶對服從といふやうな謬說を打破して嫁の位地を高め其の權利を擴張することが出來たとしても、決してそれで嫁と姑との一致が出來たとは輕信することが出來ない。寧ろそれが却て姑酷めてふ新しい嫁の攻擊材料を提供する素地を作る事になるかも知れない。

▲もとより與ふべき位地を與へ、取得すべき權利を取得するに於て誰も何等の異議を挿むべき筈はないしかしながら思ふに嫁と姑との問題は取得すべきを取得せんとの要求に依つて解決されずして、唯各互に其の本分に立返つて自省し寬容なるによつてのみ眞に解決さるゝを信ずる。かくして與へらるべき位地は自然に與へられ、取得すべき權利は自然に取得されるやうになると思ふ。

▲此の嫁と姑との問題からして聯想せられる事は、如何に今日の時代には寬容の精神に乏しく克己の勇が缺けて居るかである。而してあらゆる人生の不幸家庭の破壞、社會の缺陥、皆これが產物である。

▲此の月は各學校とも卒業期で、中等程度の女學校を卒業する諸孃も蓋し少なくないことゝ思ふ。そして諸孃の中には勿論今後一層高等の學藝を修められる方もあらうが、また全く學校生活から離れて家庭の人とならるゝ方もあれば、新に職業を求めて獨立自活の道を立てらるゝ方も多からうと信ずる。私は此際どの方面に向ふがいゝといふ事は出來ない、しかし、共通的の一の希望は、學校を出たからといつて決して修業を終はつたといふ譯でなく、寧ろこれからが修業の本場に出る所以であると覺悟してもらひたいことである。

▲兎角今日の女子が高等女學校でも卒業すると、それで一かどの修業が終つたやうに自らも心得、父兄も社會も亦許して居るやうな趣があるのは、今日の女子の位地を高める上に於て大なる障害となつて居ると思ふ。私はこの風を打破して益向上進步の首途と考へて大奮發を諸孃に求めざるを得ない。

最初のクリスマスの木（つゞき）

ヘンリーバンダイク
河口正子 譯

其流床に奔流し下る山川の急流の如く、山際から轉び落ちた大きな石が、流れの眞たゞ中に落ちたやうに、或は岩に激して混亂し、白波の音ざあ〳〵と泡洙を飛ばして居る計りで右に折れるか、左に折れるか定めかねて居る堰止められた瀧川の樣に、ウインフリードの大膽不敵な行爲はこの公衆の思想と、感情の眞中に直下したのである。

彼れ等は皆停立して居た。憤恐と驚愕、尊敬と歡喜、及混惑が普く群集中に漲つた。彼れ等は自分達の神に對する侮辱であるとして、この異邦人の闖入を憤るべきか、或は自分等の王子の救命者として彼れを歡迎すべきか、何れの方向に動くべきかを解決する事が出來なかつた。彼の老僧は祭檀の傍に沈默して蹲つて居る。決着しさうもない小田原評議は徒らにあたりの空氣をさわがすのみであつた。或る者はこの犧牲の祭を繼けてやれ、神々には和ぐべきであると。否なこの子供は殺してはならぬ。王の最もよき駿馬を持つて來て、王子の代りに殺すがいゝ、この聖樹は馬の血を好んで居るから、それで十分だと否さうぢやない、未だいゝ名案がある、神々が態々犧牲者としてこゝに導き給ふたあの異邦人を捕へてかれの命を王子の身代りに立てるがいゝと云ふ者もあつた。

枯れた木の葉は樫の木の上に沙々と鳴つて、頭上に嘯き、焚火はパット燃え上つて再び沈んだ、怒つた聲々は恰かも荒れ狂ふ波の音のやうに互に衝突して居る。やがて尊長ガンドハーは其投槍で地面を打ち自分の決心を示した。

「諸君各々意見は發表せられたが、一つも一致するものはない、皆の衆、默れ、靜肅に、そしてかの異邦人の云ふ處をきゝなさい、彼れの言葉は、かれ

が守すべきか、生くべきか、吾々に其判決を與へるに相違ない。」

ウインフリードは自分の體を祭檀の上に運び、其懐中より羊皮紙の一本の巻物を取り出して讀み出した。

「黄金の玉座に座し給ふローマ大僧正より、ヘシアン、サーリンジヤン、フランクス、サクソン等の森林の諸族への書翰。」

"In nomin Domini, sanctae et individuae Trinitatis amen."

畏懼の囁きが群集の間に起つた。

「これはローマ人の神聖な言葉である。各國の聖者のみが了解しうる言葉である。その中には魔力があるのだ、お聞きなさい。」

ウインフリードは土地の人々の言葉に譯しつゝ、其手紙を讀み繼けた。

「我々は諸君に、我等の兄弟ボニフエースを送り且諸君等に唯一の眞の信仰を敎へ、諸君に洗禮を授けしめんが爲、又邪惡の路より救ひの小道に導きかへさんがため、立てゝ諸君の僧正となせり。

凡ての事につきて父の如く彼れに聞け、彼れの敎に諸君の心を傾けよ。彼れは地上の利益を得んとて來るにあらず、諸君の魂を得んとてなり。兇惡なる行爲より離れよ、僞りの神々を拜する勿れ、彼等は惡魔なればなり。血腥き牲犧を捧ぐるなかれ、又馬肉を食ふべからず、然れども唯我等が兄弟ボニフエースが諸君に命ずる事をせよ。諸君の間に住まんがため、彼れのために家を建て、又唯一の生ける神、天に居ます全能の君に諸君の祈りを捧ぐる敎會を築けよ。」

これは誠に嚴かな、美しい力強き平和に充ちた、然かも生命ある使信であつた、其言葉の凜々たる威嚴は人々の心に強く感ぜられた、彼れ等は恰かも高調な音樂にでも傾聽して居るものゝ如くに靜肅であつた。

「然らば貴殿が全能の神より吾々に齎したと云ふ言

葉を云つて下さい』とカンドハーは口を開いた。
『この犠牲の夜、森の種族に對する貴殿の御意見をおもらし下さい。』
『これが其言葉です、而してこれが意見です。』
ウインフリードは答へた。
『夫人が其御子息を愛するのあまり、其胸から流された血をのぞいては、今宵一滴の血潮も流す事は出來ません、今宵暗黑の内に一つの生命でも消し去らるゝ事は出來ない。然し天の光より諸君を覆ふて居るこの木の大きな蔭は掃き去らるべきであります。何となれば今宵は全能の父の一人子、人類の救主たるキリストの御降誕の夜でありますから。彼れは美の神ボールダーよりも美しく、智の神オデンよりも偉大にして總明く、善の神フライヤーよりも親切であります。かれが地上に來給ふてよりは血醒き犠牲は止まねばなりません、諸君が徒らに呼ぶ黑暗なるターは既に死んでをります。ニッフルヘームの陰所深く、彼れは永久に失はれたものであります。此世界に於ける彼れの勢力は最早や衰へました。それでも未だ諸君はこの力なき神に御仕へになりたいのか御覧なさい、兄弟達よ、諸君はこれを彼れの木だと云はるゝが、彼れはこの樹に住んで居りますか？此樹を守護する事が出來ますか？』
贊同の亂れた聲が群集から起つた、人々は何となく落付かない樣に動いた。婦人達は其衣服で顔を覆ふて居る、ハンラッドは其頭を擧げて、
『ター、この仇を討つて下さい、ターの神よ。』
と叫んだ。
ウインフリードは、グレゴーを招き。
『斧を持つて御出でなさい、貴殿のと私のとを、サー若き樵木よ、貴殿の手腕を御見せなさい、森の王と云はれた、この木は今倒されねばならない。サー速やく、速やく、さもなければ凡ては失敗に終ります。』
二人は互いに向き合つて、樫の木の兩側に、彼等の場所を定めた。外套は傍に脱ぎ捨てられ、帽子も

取り去られてしまつた。十分に氣を付けて、彼れ等は地面の堅い處を求めて、踏みしめ、強く其斧の柄を掴んで、光つて居る刀身を振り上げた。

『木の神よ、汝怒かれるか？　吾等斯して汝を撃つべし。』とウインフリードは絶叫した。

　コツ〳〵と交る〳〵打ち下す斧は堅い木の幹にあたつてリズムの様に響いた。そして斧の切先きが又韻律的に高く振り上げられる時ピカ〳〵と光つて、恰かも獲物の周圍を暴ばれ廻つて居る獰猛な鷲の様に見えた。大きな木の片は樫の木の兩側のだん〳〵深く切り込まれる刻目から、飛び散つた。巨大な幹は振い、多くの枝は恰かも身震ひでもして居るやうに戰慄した。やがてウイフリードの生涯中に於ける最も不思議な事が起らんとして居る。冬の夜の静寂を破つて、暴進してでも來るやうな、恐ろしい響きが其頭上に聞えた。夫れは憤怒の黒い獵丈と敵を亡ぼさんため空中を掃過する閃光の矢をもつて、軍馬に跨つて居る昔の神々であつただろうか？　強烈な旋風が木の頂上を吹き過ぎて、其枝を握り、其大木を根こぎにした。根こぎにされた大木は、廢頽した高い塔の様に、音高く四裂きにされて、後方に倒れた。

　ウインフリードは其斧を落し、全能の力に逢つて暫時其頭を垂れた。それから人々の方に向き直り彼れは叫んだ。

『さあ、既に倒されて諸君の新らしき建物のために割られた材木が此處にあります。この場所に直ぐに其の神と其僕聖ペテロのために禮拜堂を御建てなさい。』

『そして此處に』と彼れは其目を、眞直ぐに緑も深く生ひ茂り、切倒された樫の木の廢潰せるが傍に、其頂上の梢は星を指して居る若い樅の木の上に落して云つた。

『こゝに少しも血に汚がれて居ない、無垢の生きた木があります。これを諸君の新らしき禮拜の印となさい。御覧なさい、あの尖が大空を指して居るのを

之を幼き基督の木と御呼びなさい。これを引いて會長の廣間に御運びなさい、そして今後諸君は恥づべき隱私な儀式を用ゐて、諸君の祭禮を守るために、森の蔭に行つてはなりません。諸君は今後其御家庭に於て、祭典を守り、笑ひと、歌は其内に滿ち、愛の古い儀式が行はれるのであります。雷神の樫の木は倒れました。そして獨乙全體を通して、普く子供等の基督の降誕の夜、緑濃き樅の木の周圍に集うて喜び歌ふ事のない家庭は一軒もないと云ふ時が將に來て居ると思ひます。」

そこで、群集は樅の木を其處からぬき、歡喜に滿ちた行列を作つて林の中の小路の端まで運び、それから橇にのせた。馬は恰かに新らしい荷物が其荷を輕くしたかの如くに、其頭を投げて勢よく引き出した。ガッドハーの家に一行が着いた時、彼れは大廣間の戸を廣く開けさせて、其中央に其の木を置いた彼れらは燈を一面に飛ばしたやうに、枝の間に燈を點し、小供等は驚き且不思議に思ひながら其周圍に座し、バルサムの芳しき香は家中に充ちて居た。

ウィンフリードは廣間の端の上段にガンドハーの椅子の傍に立つて、ベツレヘムの物語を語つた。又秣槽の中に臥したる嬰兒、山の上の羊牧者、天軍と其眞夜中の讃美の歌の話などを語つた。聽衆は皆魅いられた如く、靜肅に耳を傾けて居た。併し、イオーマの膝の上に、其母の柔かい腕に抱かれて居たバーンハードは、話が長くなるにつれ、退屈して來たものと見え、靜かに母親の耳に囁き初めた。

「母樣！」と小供は囁いた、「何故、先つきあんなに大きな聲を御出しになつたの、御坊さんがバルハラに行けつて、私に被仰つた時。」

「オー、靜かにして被居つちやい!!」と母親は制しながら、彼れを抱き締めた。

「母樣。」と彼れは彼女の胸の汚點になつて居る處に其指を置いて再び囁いた。

「御覽なさい！　着物がこんなに赤い、この汚點は何？　誰か御母樣を怪我させたの？」

母親は柔和しく接吻して、子供の口を閉ぢさせた。
「靜かになさいね。」
小供は從つた、彼れの目は殆ど眠くて明いては居なかつたが、それでも、彼れはユダヤの山々を飛び乍ら歌つて居た天使の群について、ウインフリードが話した、最後の言葉は皆聞きとる事が出來た。其子供は不審に思ひ乍ら、夢でも見て居るのかやうに聞いて居たが、俄かに其顏が輝いた、そして彼れは再び其唇を母親の頰の近くに寄せた。
「オヤ！母樣！」と彼れは聞きとれないほどの低い聲で囁いた。
「一寸、沈默つて被居つしやい、母樣あれを御聞きになつて？ 天使達が今一度歸へつて來たのね、あゝ今あの木の後で歌つて居ますよ。」
そして或る者は此れは事實であると言ひ、又或者は、これは廣間の下座の方に居た、グレゴーと其一行の者がクリスマスの讃美歌を歌つて居たのであるとも言つた。

All glory be to God on high,
And on the earth be peace,
Good-will henceforth, fromhearen to men,
Begin and never cease.

「天上ところには榮光神にあれ
地には平安
人には恩澤あれ。」

（完）

光れる庖丁

木岡莞爾

「天地の主なる父よ此事を智者達者に隱して赤子に顯したまふを謝す」（馬太十一の廿五）京都の碁盤やうな町を、潑溂たる鮮魚の一荷を肩にして、得意廻りをする肴屋の小僧があつた。或る家の夫人が彼に對して親切に、しかも優しくあしらはれたから、彼は母親のやうに懷かしく感じた。まことや此夫人は基督敎の信者であつたのである。小僧は基督敎に對し斯う考へた、此敎はよい敎には違ひないが、中流以上の方の信ずる敎であらうと。しかし彼の心の裡にはもう幾分かの潤があつた、之れがやがて發芽する端緒となつたのである。
彼は其後神戸に移り、常盤花壇の料理人となつた或る夜湊川の堤

防を散歩して居たとき、涼風に送らるゝ讃美の聲に導かれて、路傍說教を聞くの機會を得、毎夜其聽衆のうちに加はつた。彼は一夜は一夜より魂の進境を見ると共に、罪深き身をかこち、悔改を促さる毎に、求道の快心を告白せんと、幾度びか〱思ひ定めてはまた躊躇して其儘となつた。此割烹店にもと汽船の事務員をして居た、信者と稱する帳場の番頭があつた。此兩人が申合せて常盤花壇を拔け出し、山陽道を無錢旅行しつゝ須磨寺まで來たが、爰にはしなくも兩人信仰上の職が初まつたのである。墮落信者の番頭は、郷に入つては郷に從へで、他人の尊敬する寺であるから、信者でも矢張相當な禮儀を盡くすべきであると、禮拜同樣の行爲をしたのであつた。料理人は信仰の火の燃えて居たときであつたから、之に反對して苟も眞の神を信ずる以上は偶像を拜することは意味のないことであつて、十誡にも反く譯であると極力抗辯した。遂に兩人は廣島まで來て、餘儀なく袂を分つことになつたのである。番頭は給薪が得意であつたから、書筆で口を糊し下關に向ひ、料理人は廣島に滯留して過ぎし日湊川堤で教の緒を得た某教會を訪ふて、牧師に面會を求めたが、生憎近郷に旅行して明朝十時頃歸らんとのことであつた。彼は身に一錢の貯蓄なく進退谷り、ある普請小屋の鉋屑の中にもぐり込み、前後も知らず寢入つた。東天の微光に目醒むればいつか小雨が降つて居る。見付かつては大變とあたりを見廻しそつと忍んで出た。時刻を計り空腹を抱へて再び訪問したが、既に外出して不在であつた、午後の二時頃には歸らるゝと聞き、三度び訪問してやつと面會が出來た。彼は是迄の惡戰苦闘を語り、料理人に雇はれたき由を述べたが、同情厚き牧師は彼を伴ふて其向々へ紹介せられた。生憎にも雇ふべき家がない。已むなくば宇品で汽船のコックに雇はれ神戸へ歸らんと覺悟して一先つ牧師館まで戻つた。此教會に神學生四五名を收容せる寄宿舍があつたが、其炊事女が郷里の親族から大患との通知に接して、急遽歸國のことを申出でた。丁度願つたりかなつたりで、料理人は此寄宿舍に住み込むことゝなつた。僅に一ケ月位であつたが、此間に教理も研究し、非用度洗禮も受けた。彼今は茅ケ崎南湖院の炊事場で忠實に働いて居る。彼は「小子どもよ食物あるや。」「魚を少し携ち來れ。」との主の聲を聞いて居ることであらう。

花の籠

義務

この間、短かい物語を讀みまして、少年少女諸君のことを思ひました、それをお話しいたしませう。

イギリスの或る紳士が、旅へ出かけやうとして停車場で汽車に乘つて居ますと、一人の鐵道の役人がプラットフォームへやつて來ました。其役人は胸に美しい花を挿して居りましたが、其度紳士の乘つて居る窓の眞向に來ました時、醉ひどれの無頼漢が、其役人の胸から花を奪つて、列車の下へ抛りました。こんな失敬な仕爲は、誰でもビリーとひどく感じるものですから、紳士は、其役人がどうすることかとぢつと見て居ました。役人の顔はさつと赧くなり、しつかり固めた、拳固は今にも降りさうでした、併しそれは降りませんでした、役人が身を轉じた時にその唇がたゞ一層キリヽと結んであつた丈でした。すぐと紳士はぢきそばの役人を見て、

「君、君は立派に振舞はれましたね」

と云ひました。

紳士は、役人に對して役人がかためた拳骨を擧げて、憫むべき醉漢を打つたよりも、一層高い感嘆の情を持つたのであります。諸君はさうは思はれませんか。とにかく、彼は「君、君は立派に振舞はれましたね」と云つたのです。その役人はかう云ひました。

「もし役目の時間でなかつたら、私は彼を打ち倒してやりましたでせうに」

「役目の時間！」彼は自分が、單に人であるばかりでなく、役人であるといふことを憶えて居たのであります。彼は制服を着けて居ること、鐵道會社を代表して居ること、その會社の威嚴と名譽が肩に懸つて居ることを憶えて居たのであります。

彼が拳骨を握りしめて、打たうとした途端、「今自分は役目をして居るのだ」といふ考が浮びました、

それで彼は自分を抑へつけて了つたのであります。すばらしい事です。諸君も役目をして居るといふことを、憶えて居られたなら、時々は握り拳を緩められもするし、不親切なことを云はずに濟むかもしれません。云つてならないことを云つたり、不親切なことをやらうとする、不意の誘惑が來た時、自分は今役目をしてゐるのだぞといふことを憶ひ出して頂きたく思ひます。

あなた方は日曜學校の生徒ですから、もし何か惡るい事をするやうな試驗に逢ふ時は、この教會の名譽は、自分にかゝつて居るといふことを憶えて下さい。教會の耻になるやうな事を決してしてはなりません。

又諸君のこらずに御兩親を心に留めて頂きたい。諸君は義務をもつて居られます。諸君は御兩親のよい名を嗣いで居られます。御兩親の心も諸君が嗣がれるのです。爲てならない誘惑に逢ふ時は、御兩親に對する義務をお憶ひ出しなさい。然して、何よりも第一に、神様が諸君に義務をおゝきになり、諸君は神様の名譽を擔つて居ることをお憶えなさい。

もし諸君が、此らの高尚な考へを、諸君の心に持たれたなら、後來諸君が思つて耻ずる樣な種々な事をされる事は決してありますまい。

わが友諸君、我等は老へるも若きもすべて、かの光輝あり鼓舞の力ある『役目の時間』『役目の時間』といふ思想を、我等の心の底に取り入れ樣ではありませんか。（ＭＭ譯）

我校のクリスマス（續）

宮城女學校靑年會員

狐色や褪紅色のやけ毛布、流氣よろしき穴毛布を肩流す人々、大褞袍かつぐ人、ちつぽり被つて頸縮める龜の子嬢ちやんもある。子は龜色になつた白のショールを頭から被り自慢の赤毛布を引きづつて、マントでも着た氣でチンと澄す、左手に讃美歌、右手に赤い提灯、揃つて見ると頗る妙痴氣杏な格好丸で馬喰の勢揃ひ闇を縫ふて行く後姿を、時的に云へば漂流人！　踏む足も輕く、白雪の上をサクヽと校庭四阿へと集まる、仰げば高い山の端に獨り煌く明星は二千年の昔を偲ばせて思ひ走るは遠きユダヤの野。

Holly night peace-full night
All is dark save the light

歌ふ我等が聲は靜けき闇の空氣を破って四方に擴がり行く、口を開く毎に呼吸が提灯の光に白く見える、三十三番がすむと一行は又歌ひ乍ら、寄宿舍の窓下へ行く、暫らく立ち止って歌へば二階の硝子戸がガラット開いて、第一番に原田先生「メリー、クリスマス」先生の御注文で三十五番を、しかも頗る上手に歌つた、次ぎへ／＼と窓下をうねり行く、清い讃美の聲に小女子は夢を破られて皆飛出す、此方の窓も、待ち佗びてか向ふの窓もガラリ／＼と開く、そして「メリークリスマス」の連發、どの顏も／＼喜びの色が滿ち／＼て居た。

Haik the glad sound the Savior comes……

舍監室の下に立つ、ガラリと開いた窓からスル／＼と下りて來た一片の紙を受けて手を離せば、又スル／＼と上つて行き今度は、交替に大籠がぶら下つて來た、純白なサンタクロース、籠の中は蜜柑がぎつしり、これは我等の母君の賜物、

Joy to the world, the Lord is Come,
Let the earth receive her king,……

若き小女の甘い夢は總て破り終えてから、西洋館にゆく、第一にミス、ブリックの寢室の下

Carol, sweetly carol. a Savior born to-day,
Bear the joyful tidings……

「メリークリスマス」眞白い顏が現れて嬉しげに手をふつたのはミスブリックだ次に、ＹＫさんの案内で桓をぎり／＼開けて、西洋館の中庭に廻り、こゝがミス、リーダーの寢室なりとて歌ふ。

Come hither, ye faithful, triumphantly……

いつ迄歌ふても窓が開かぬはてなと思へば、その筈、こゝはスタデールームだ、引き返して一廻り、ミス、ハンセンとミス、リンゼイの下に行く「ミス、ハンセンに聽かれると恐い、もしか間違ふと惡いから、やさしいのを歌いませう」、「でもＫさんなんか九十點以上だから、どれでも歌へるでせう、ミス、ハンセンがきつと喜ばれるでせう、Ｙさんは」「私はね、五十點よ、あゝ、いやだ／＼、こんな時まで、音樂の點數がつきまとふのですか」とＹは萎れる「フラツトするといけないから、靜に、出しませう」とＫさんの發聲、

It Came upon the midnight,
That glorious song of old……

窓が開いて、二つの顏が一緒に「メリー、クリスマス」ミス、リーダーも來られる。

From angels bending near the earth
To touch their harps of gold……

極々注意して四つ程歌つて、それから今度は校長邸、あの林檎の樣な頰のリチャード坊つちゃんが起きてくれればよいが、

Away in a manger, no crib for bed,
The Little Lord Jesus laid down
His sweet head……
The stars in the bright sky looked
down where he lay——
The Little Lord Jesus asleep on the hay.

「メリー、クリスマス」校長先生の太い御聲、續いて、夫人の優しい御聲、

Little children, Can you tell,
Do you Know the story well,……

「メリー〳〵クリスマス」期待した愛らしいリチャード坊ちやんの聲が銀鈴を振ふ樣に響く、三つほど歌つて戻らうと思ふと可愛いゝ唇から鈴の聲が洩れる、又歌ひ終えて、くるりと後に向ふと、又、メリー〳〵の連發、一歩退いては立止り、二歩返しては歌ひ、とうとう、東の空もほの白くなる頃まで、愛らしい小人の窓下に佇んだ。

偖一行の落ち行く先きは、パイプル、ハウスの大廣間、仕切をはづして明け放した、急拵へ、歡迎の心籠めた美はしい星の飾、いつもすまし込む事の好きな御姉樣方は、皆にこ〳〵して嬉い御待遇御馳走は熱い小豆煮、御姉樣方は大食官を、飽く迄發揮させてやろうとてか、人でも煮そうな大釜にどつさり一杯、「みんな一杯煮たんだから澤山食べなさい」とパイプル、ハウス王の有難い御說、四十七士が夜討ちでもした氣で、舌皷打つて頂く、蜜柑もあちこち轉げ廻る、姉樣方が寄宿舍の三大物だの、何れと、面白く笑せられる、竹中先生の御櫛は、其一物とか、喋つたり、笑つたりし乍ら、一生懸命に數杯を傾けて箸をおく、王樣曰く、「Ｙさんがもう止したの、あゝ、不思議だ〳〵」と、○姉樣が手早く御茶碗をとつて行かれる、「もう本當に、澤山ですから」と、言ひ切らぬ中に、滿々とよそはれた、みんなの顏がＹ子に集つてクス〳〵笑つてる、姉樣方に食べなければ歸さぬだの、藝をさせるなど、いぢめつけられる、「なあに、負けて堪るものか」と、大茶碗を取上げて、ズーッと一すゝり滿座手をうつて笑ふ、後の窓開く音もせず、不意に、ジャラン〳〵〳〵〳〵百鈴の一時に落つる音、「わつ」と一同吃驚仰天、顧つてみれば、西洋人の先生方四人、手に手に鈴を持て、カラ〳〵笑つて居られた。

六時の鐘が鳴ると自修室で早天祈禱會、校長先生も內外の先生方も常に寢坊な人達も皆にこ〳〵して集る、美しいクリスマスの歌をミス、ハンセンのピアノに合して歌ふ、殊に先方の手がやたらに走る樣に見えて、聲も大層勇しく愉快に聞えた。感謝に充ち喜に溢れて祈りを捧げ讃美して終に舍監先生のお祈で會を閉づ、

自分の部屋に歸つて見れば、サンター、クロースがいつの間にやら來たと見えて机の上に山なす贈物、御主人の御歸りを待て居る眠いのを我慢して、にこ〳〵し乍ら一々紐を解くと好きな油繪流行の櫛半襟其他の數々見終へてもう堪まらなく眠くなつて、取り散らしたまゝ横はる、Ｔさんに、呼起された時は、もうお晝の鐘、眼を擦り〳〵食堂にゆく、いつも淋しい御膳が賑々しく竝立てられた、おいしそうな御口取やら御肴やらこれも御心籠めたる御母樣の御馳走と、胃袋によりをかけてすつかり頂く、そして又舌皷、午後は思ひのまゝに過す。

喜びを告げる鐘の音が師走の空に鳴響く、常盤木の飾り美しく、燈の輝きまばゆき中に早々と登校した少女子、嬉々として笑ひ囀めく、六時半の第二鐘に整列し、「もろ人こぞりて」とピアノに合せつゝ讃美しながら講堂に入る、嚴肅なる祈禱あり、喜ばしき讃美歌催しも樣々あつた、それは三つに分つて、一キリストの降誕、二、博士の拜み、三、キリストの光りを負ふ人。としてピアノ、オルガンの彈奏も、又講師も、コワイヤの歌も總べてこれに因んだものであつた、中にもオルガンの博士の進行曲は實に美はしく耳に響いた、星の光りも博士等の步みも調べの中に現はれて二千年前のこの夜を偲はれた。

終りに、キリストの光りを負ふ人。校長が光りの中心となられて

大蠟燭を點し講壇の前に立たれ、全校生徒が各々蠟燭をボール紙の星にのせて持ち、中心の光りより灯を移し、讃美歌八十番「星のしるべに」を歌ひ乍ら講堂内外も二階も教室もマーチした、斯くしてキリストの光りを負ふものゝ他に光りを傳へ、何處の果てまでも主の光を輝すべきを學んだ、一年の小さき少女より大きい西洋人の先生まで、手に〱光りをさゝげて輝し闇の夜も恰も晝の如く照り、人は皆光りに歩みへ感謝に充ち〱て、校長の祝禱を以て終り、後菓子蜜柑の分配あり、先生も生徒も喜び樂しんで各々家路に歸るへ斯くして私共は冬の日足らぬばかりに喜び樂しんでクリスマスを祝ひました。

和歌

辻村靖子

○春雨

たらちねの母の添乳の子守り唄
きゝつゝ眠る春の夜の雨。

そめかゝもいまだ動かぬ閨の戸に
灑ぐ小雨の春のこゑする

○渚

小貝ふむいさごぢしめり山繭の
いとひくごとき、波のよりはも。

○大學構内の旦

霜のあした、靜にきけば洪水の
よるかとぞ思ふ、都のひびき。

大空の、梘の叫びに、みさび江の
さゞら波立つ、銀鱗のごとく。

以賽亞書

牧師　横田貞治

第六回　第二以賽亞の僕觀(上)

附　僕の四詩

第四十二章一節――四節
第四十九章一節――六節
第五十章四節――九節
第五十二章十三節――第五十三章十二節

(一)第四十二章第一節に於て神の僕の性質を說明す

(1)神の力によりて僕の支へられつゝある事(わが扶くるわが僕)

(2)神の愛によりて撰ばれたるもの、(わが心よろこぶわが撰人)

(3)エホバの靈に感んじたる者なり、(我が靈を彼に與へたり。)之を第一以賽亞十一章二節のメシヤの上にエホバの靈止まらん、これ智慧、聰明の靈云々と比較せよ。相似たる所あり。

(4)此僕は其最極の目的なるエホバの言葉を萬民に傳ふる使命を有す。異邦人に道を傳ふべし。

以上が僕の說明であるが、此處に一寸注意すべきは聖書中最も古いギリシヤ譯によれば、「我が扶くる我が僕ヤコブ、わが喜ぶわが撰人イスラエル」とある果してこの僕とは誰かヤコブか、イスラエルか、

二節より三節は僕の宣教の方法を說いて居る。二節――この僕は前の豫言者等の如からず、靜肅にして、自らを廣告する事なし。第三節――は僕の慈、親切なる傳道法を云ふ。憐れみ、愛、誠實は其特徴なり、即ち人間の外觀には惡しく無智の如く見ゆるも其內には尚同情すべき點がありよき物を藏すと、よりてこれを見出して、はぐくみ育つるは此僕の爲す所である。故に只徒らに先きの豫言者の如く禍を豫言し惡を罵倒せず、民の罪を批難せず、同情を以

て其民の心を育てんとせり。如何にイエスが稅吏、娼婦、罪人の輩に對せし態度に似たる哉、然して只同情を以て接する丈にあらず、其同情の中に眞理を以て道を示さんと云ふ所がある。即ち同情が進んで福音的となれるは恰かもバプテスマのヨハネよりイエスに進みたるの感あり。而してこの僕は四節に於て自らは喪膽する者にあらず必ず道を地にたて、神の使命を全うし終らんと云つて居る。

(二)第四十九章、第一節し第六節、先づ諸々の島よを以て始まり、萬國民が其相手である。一節に其エホバによりて豫言せられたりと云ふ、二節にエホバの武具としてあるも、時至るまでは隱れたるものである事を語り、三節には僕自らエホバの聲を聞く、恰かもイエスが今や公生涯を開始せんとするに當りヨルダンの天開けて、聖靈鳩のごとくに下り來るを見「又天より聲ありて、此は我が心に適ふわが愛子なり」の聲を聞きし樣なものである。此處には此僕ハイスラエルと說明してあるが、果して、個人を云ひしか、國民合體を云ひしかは後にこれを說く。四節に於て、一度は失望の如くなれ共、萬事を神の御手に委かす僕の態度を云ひ、其信仰の結果として、五節、六節に於て、其高き使命を明らかに示して居る、即ちイスラエルを起すのみならず、異邦人の光となるべしと云つて居る。此僕イスラエルと三節には云ひて、六節にはヤコブの支派とある、この區別如何?

(三)五十章、四節——九節、僕の歌、此處にはエホバの僕と云ふ事を特に云つて居らぬが、他の詩と比較しても此れのみ讀み行きても、之が理想的エホバの僕を歌へる事、明らかである。四、五節に於てエホバと僕との關係密なるものあり、師弟の如きものなるを語り、僕全く己を棄てゝ、只エホバの敎を聞き、語る言葉を與へられ、人を慰むる力を授けられたる事を歌つて居る。六節は此僕の迫害を受け、之をよく忍ぶ有樣を預言して居る。○鬚をぬかるゝはイスラエル人にとりて大なる耻であり、威嚴を損す

る事である、七節に斯く人に辱かしめらるゝも、エホバ僕を助け給へば恥ずる事なしと、我が面を石の如くせり」とは決心をなしたりの意で、又「我は恥しめらるゝ事なきを知る」と云つて居る。八九節は僕自らの罪なきを自覺して必ず、エホバの助あるを信じて居る。五十節の僕の歌で前二つと違ふ所は僕の迫害を受くる點のみである。第四に至つて、是が更に明瞭にせられる。

(四)五十二章、十三節――五十三章、十二節。有名なる悩める僕の詩である。前三つの單に神より遣はされたる豫言者の感を以たしむるに對し、此處には悲しみの人、悩める僕を思はしむ「誠にその罪を負ふ神の小羊を見よ」十字架にかゝりしイエス其人を豫言せるの感あらしむ。

この詩は三分し、(1)序言、(五十二章、十二節――十五節)簡單に五十三章に示す僕の生涯を説明して居る、十三節、兎も角此僕のなす處は智恵によるものなれば、終には榮ゆべし、と云ふが冐頭である。十四、十五節には前の驚くべき迫害にて苦しめられつゝありし僕が、後に光榮となる。○「多くの國民にそゝがん」「そゝがんは一寸解しかねるが、飛び立つ、跳ね上ると云ふ意ならんと云ふ。跳び立たしむる、則ち國民を驚かすと云ふ、前程を置きて、(2)五十三章一節――九節、僕の先きの狀態、即ち歷史上に顯れし彼れの低き狀態、一、エホバの僕の事を信ぜしものは誰なるか、誰がエホバの力がこのみにくき僕の内に働いて居るのを見る事が出來たか? 又皮相的に見ては、エホバに棄てられたるが如き此僕の背後に見へざるエホバの手が働いて居るかを認め得しものありや、二、僕の出始めは誠に小さく哀れなる、見るべき姿なき狀態、三、悲しみの人、侮らるゝ人と云つて居る。○病患の人とは、或は人に厭はるゝ癩病なりしならんと云ふ說もあり、四節より六節まではこの苦しみ、病患等の眞意を語つて居る、之れ舊約聖書中にて驚くべき思想である。……乃ち僕は代理的に受難をせり、と云つて居る。七節

より九節までは僕が如何なる態度にて、此れ等に對せしか……七節には彼の態度の柔和なりし事を云つて居る、八節の初句は少し面倒である。『彼は虐待と審判とによりて取り去られたり、』は虐待の審判によりて殺されたと云ふ意か、或は『虐待と審判とより取りさられた』と云ふ意か、乃ち死は是等を辛じて免かれしめたと云ふのであるか、何れにしても其終りは善くはない九節、惡しき者と、富める者とは反對なりと云ふ様に云つて居るが、これは寧ろ同格である。『其墓は惡しき者と共に設けられ、死るときは富めるものとともになれり。』富める者は壓政者或は虐待者と云ふ意の文字に訂正し、解釋する者があるが兎に角、僕は死しても未だ、惡人扱ひにされ、逆賊扱ひにさるゝと云ふ意である。同節の下の句を『よし彼は暴を行はず、其口には僞なかりしといへど』と訂正すれば其意味明瞭となる。

(2)　五十三章、十節――十二節、こゝに於ては光榮ある將來と死にまで服從せし、僕の驚くべき成功を宣言して居る。十節には、之れ實に彼が其靈魂を愆の獻物として捧げたる、大なる犧牲を說いて居る。〇『末を見るを得』末とは裔、種である、救に入るの人々を見るに至る、つまり萬民の救が來て、この僕は永遠に生きるの意味である。〇『エホバ悅び給ふこと、』とはエホバの目的を云ふもので、斯くの如くエホバの目的は惱める僕によりて完成し、且榮ゆるの意である。十一節は、十節を敷衍して、僕が、多くの人を義とする事を云つて居る。〇『心たらはん、』……心が滿足するの意、〇『智識』は僕の持てる神の智識及其救を云ふ、十二節、この僕が其苦難の報として、世の征服者となる事を豫言して居る。

以上はエホバの僕をうたへる詩である。偖て此處に起る問題は、此僕とは唯であるかを考へて見たい。（つゞく）

◉定期中央委員會

二月十九日午後三時十五分神田區北神保町十四番地なる日本基督教女子青年會本部事務室に於て日本基督女子青年會定期中央委員會を開く。深井委員長病氣のため缺席につき星野愛子代りて議長席に着く。出席者は星野愛子三谷民子、志立たき子、長谷川喜多子、津田梅子、山田千代子、井上友子、ミス、ウエスト、ミセス、クレメント、ミス、ページ、加藤高子、ミス、ペーカー、ミス、レーガン、河口正子、外に横濱青年會々員野村道子も列席せり。

長谷川喜多子の聖書朗讀及び祈禱を以て開會し、初めて昨年十月開會せし定期中央委員會及び同十二月開會せし臨時中央委員會の記録を河口正子朗讀し、承認可決せり。次に單に財團法人理事及監事の任期屆出での都合により理事及監事の任期の大正四年二月一日に始まるべきものを、大正五年二月一日に變更する事に決す。又ミス、マクドナルド幹事辭職により中央委員たるの資格を失ひたるを以て、當然理事たる事を得ず依りて其後任理事として、ミス、レーガンを選擧す。

右變更によりて定まれる理事、及び監事の任期は左の如し。

井深花子、大正六年一月末日に至る。
岡見京子、ミスレーガン、大正七年一月末日に至る。
河井道子、津田梅子、大正八年一月末日に至る。
ミス、ウエスト、大正七年一月末日に至る。
三谷民子、大正八年一月末日に至る。

右終つて新任中央委員、志立たき子氏の紹介あり。

各地よりの通信報告に移りミス、レーガンより夫れ〲左の書翰朗讀せらる。

(イ)萬國女子青年會本部より、我が日本女子青年會に於て、英國幹事の派遣を希望するや如何の照會、これにつき、十二月開かれし臨時中央委員會席上にて決議されし、今年九月に派遣さるべき三人の外國人幹事中一人をミス、ワトネの代りとして、

萬國本部より派遣せられん事を希望する旨を回答せしことも併せて朗讀せらる。

委員會は右に賛成の意を表し、尚委員會は、萬國本部に、今一人の英國幹事の派遣を得ば、幸にて之を希望せる旨を云ひ送る事を併せて決議す。

(ロ)米國女子青年會本部より Miss Hagel Verry 九月來朝の通知。

(ハ)神戸婦人クラブよりの同市に旅行者の友事業を起し度き旨の照會。

これに對しては本部は經濟上に關する狀態等詳細なる通知を送られん事を請求して回答せし事の併せて報告せらる。

委員會は右詳しき通知に接する迄は、何等の行動をも取らざることゝす。

是に就きては、神戸、大阪等に於ける女子青年會支部が此働を助け、出張すべき係員の俸給を負擔するは、支部會員の好みてなす處なるべしとの山田千代子の意見あり。

次に會計報告に移りミス、レーガン報告書を朗讀す。

續いて、如何にして本部諸般の費用として、入用なる金額を募集すべきかにつきて、種々の協議あり是れにて時間不足のために横濱、東京、本部、學生青年會各支部、雜誌『女子青年界』等に關する、諸報告は之を省略したり。

又中央委員會は、横濱女子青年會の爲、昨年御大典に際し、奉祝用小國旗徽章を販賣して、金五百二拾圓の募集に盡瘁せられし、横濱女子青年會々員に對し、感謝狀を送る事を決議す。

右を終つて議事に移り左の如く決議せり。

(イ)本年開かるべき夏期修養會々場の件につき、先づミス、レーガンより男子青年會幹事フイッシャー氏との會見協定事項につき報告し。且つ男子青年會は、女子青年會の自らの蒲團を用意すべき事、及び修養會期日につき、男子青年會修養會が七月二十五日或は二十六日まで開かるべきにより、女子青

年會は其の二十六日以後に、其の期日を定むべき旨の注意あり。中央委員會は右報告に基き若し可能ならば、御殿場同青年會修養會々場を使用することを可決し。蒲團は買ひ入るよりも必要なる時日間借入るゝ事に決す。時日につきては種々協議の結果、七月二十六日以後一週間よりも、八月下旬に於ける一週間の方を可とす、然れ共若し定まりたる時日、即ち七月二十二或は二十三日より開催して右會場を使用し得るや否やにつきて尚一應男子青年會に交渉を試むる事を決議す。

(ロ)本年度修養會委員を左の通り指定す。

小此木松子、(委員長)星野愛子、三谷民子、長谷川喜多子、植村環子、志立たき子、山田千代子、井深花子、松宮信子、小池實惠宮川幹枝、阪本花代子、野村道子、

(ハ)小室みゑ子を東京青年會委員を代表せる中央委員に選擧す、廣島女學校長ミスゲーンズ及ミスソール未だ歸朝なくば中央委員たる資格を失ふを以て其補缺として神戸女學院ミス、デフォレストを選擧す。

(ニ)男子青年會が近日建築せんとせる、新會館内の一郭を日本基督教女子青年會本部事務所として、借入るゝ件につき男子青年會へ照會する事。

(ホ)幹事ミス、アズグドの辭任す。尚本部事務員河口正子、横濱女子青年會事務員伊藤菊子三月末日を以て辭職件承認、

(ヘ)東京、横濱、神奈川に於ける各學生青年會支部役員の聯合協議會開催につき四月中に開會の運びに至るべきやう計畫準備をなす事。

右終つて閉會す。

○東京基督教女子青年會

▲音樂會　二月十二日(土)午後より本會館に開催す。鈴木のぶ子孃の私唱、藤田愛子孃のピヤノの獨彈をのぞくの外は皆西洋の方々の演奏にて、ピヤノ獨彈及び聯彈、男聲三部合唱、低音獨唱、二部合唱等十五曲目ありたり。當日は會場の狹隘を感ぜし程の盛會なりき、斯くの成功を來せしは演奏者諸氏を

始め會員會友の同情と多大の盡力に依りし結果と感謝に堪へざる次第なり。諸雜費を差引き純益金百四十圓也を得たり。

▲西洋料理十回講習●●●●●●● 教師は小此木武子夫人にて二月第一月曜日午前十時より第一回を開始す。七名程の應募者あり。

▲女子計算員養成料●●●●●● 今回新設せるものにて、目的は銀行會社等の計算事務に必要なる學科を敎授し實務に適するものを養成するにあり。敎科目は商業簿記、珠算、實務、商業要領等なり、授業時間は午後四時卅分より六時卅分までにて土、日曜を除きて每日とす。入學資格は小學卒業の學力を有する十六歲以上の女子とす、授業料は每月金壹圓每月一日前納とし、六ケ月にて修了す。猶專科の設ありて簿記及び珠算のみをも敎授す三ケ月にて修了。照會次第規則及び入學手續等を通知すべし。

▲イングリッシ、スピーキング、ナイト開催計畫●●●●●●●●●● 折角勉强されし英語も使用の機會に乏しきため次第に退歩の傾ある婦人の多數なるを遺憾としかゝる婦人のために一つの集會を開き僅少の會費を以て相互に樂しき時を送りたき希望にてこの會を組織せんと目下計劃なり、贊成の方は奮て申込ありたし、開催の期日を通知すべし。

○旅行者の友報告　東京基敎女子青年會所屬

旅行者の友にては今回左の印刷物を配布したり。

大正四年も將た暮れなんとする一日東京停車場內なる女子青子青年會旅行者之友の一係員の許に、二人の娘が聞くだに恐ろしい哀れな物語を持つて來ました、この娘等は二週間前までは其の在所である一寒村の貧家に相當に暮して居つたものであるのが、以前同村に住居して居つた某夫婦が歸省して其の在所を訪ね、東京にある某家に女中が入用なりとて前記の二人を傭つたのであります。この夫婦者は彼等が故郷をを去つてから非常に成功し大金をもうけ今では一かどの財産家で今度住宅を新築したいてこれがため七人の女中が入用であるとゝと誠しやかに虛言を吐き巧に誘拐したので世馴れぬ田舍娘の七人は其言葉を信じて其の夫婦に從つたのであります。彼等は東京に着くやいなや或一軒の家に伴はれはしたものゝ女中としての仕事を與へらるゝとは思ひのほか一室に幽閉されて終つたのであります。籠中の小鳥の如き彼等は日夜夫婦の見張りが嚴しきため如何にもかき苦しむも到底逃げられさうもなかつたのですが前記の二人は暫時の後大膽にも意を決して二階の窓より飛び下りて、最初着い

た東京スチイションに行き幸ひ旅行者の友係員の手に救はれたのであります。この話の一伍一什を聞いた係員は非常におどろいて、早速警察官に其由を告げこゝ娘等を先づ本郷なる旅行者之友宿泊所に送りました。この逃れた二人の娘は勿論東京には不馴れな處から明瞭に其家の場所などを説明する事が出來なかつた、警察官が其家をたしかめ得たのは二週間後の事でありました。然し幸ひ殘つて居つた五人の娘達も皆救はれて各々其實家に歸へる事が出來ました。そして彼の夫婦は遂に捕へられて罪に處せられたさうであります。

これも同じく大正四年の始の頃、十七歳と十八歳と十九歳の三人連の娘が、東北から着いた列車の乘客が皆各々其行くべき道に散じた後も尙驛内をふら〳〵と徘徊して居るのを見た旅行者之友係員は其擧動を不審に思ひ行先きを尋ねると、芝に居る叔母を訪ねに行く處であると答へはしたのであるが、なほいろ〳〵話をして行く間に實は東京には一人の知己もなく又東北地方の一工場から逃けて來たものであると云ふ事實をも白狀致しました。そして彼等の云ふ處によれば工場の仕事が難しく且無味乾燥でつまらなくなつた爲逃げようと決心し、幸ひ其日の烈しい吹雪にまぎれ、これでは追手も容易に來られないと見てとつた三人は工場をぬけ出して吹雪中を五六里が間ひた走りに走り、夫よりとある一小寺に殘の夜をあかして其翌朝東京に向つて來たのださうでありました。この娘も又同じく旅行者之友宿泊所に連れ行きそれ〳〵保護を加へ後市内の嚴格なる良家に奉公させ今も幸福につとめて居ります。

これ等は唯其最も著しき一二の例に過ぎません。尙右の如き場合は一々枚擧に遑なきほどで、これ即ち市内各停車場に旅行者保護の働が必要なる所以であります。

東京女子青年會はこの事業に着手したのは僅に二年前でありますが、今日では益々其必要を認められて上野及中央の兩停車場に於て盛に其の働を繼續して居ります。試に過去一ヶ年間に於ける經過を申しますと、保護を加へ且旅行者之友宿泊所に一夜乃至二週間宿泊せしめた婦人等は實に百三十五名を算し、內八十五名は十五歲より二十歲までの少女であります。又前記總數中七十五名は當所係員の斡旋によつて各良家に奉公の口を得て居ります。當所では先づ奉公せしむるに先立ち其雇人先を充分に取調べ且又各本人の保護者に照會し相談したる後に定めるのでありますから其落着を見るまでには非常な時間と勞力を要するのであります。尙殘りの六十名は其親元親族等の許に歸へらしめたものであります。保護を加へしものの大多數が逃走者なるがため、これを處置するにつきての通信其他頻繁なる手數を要する事は非常なものであります。

彼等が東京に來るについての經歷を調査するに三つの重なる理由があります。即ち當所に於て保護したるものの中八十八名に就き內譯すれば其三十二人は職業を求めんため、三十二人は家庭不和合のため、而して二十四人は工場生活の殘酷にたへかねて逃走せるものであります。

右の外に或は忠告を與へ或は道案内をなし或は荷物の世話をなしたる等を數へれば實に數百名に達して居ります。

昨年中は三人の係員が專任となつてこれがために働き上野及中央の兩停車場に着する列車は凡てこれを迎へ、各の必要に應じて世話を致しました。昨春鐵道院管理局の厚意により中央停車場に於ける旅行者之友係員の控室として待合室の一隅を使用する事を許されました。これがため今では係員は其保護を要する婦人達と種々談合

するに必要なる一室を御て其の働きの上に多大の便宜を與へられて居ります。

旅行者之友宿泊者は本郷區湯島天神町一丁目二十四番地にありまして、係員の中二名は此處に常住して居ります、そして宿泊する婦人を其手許に起居せしめて保護及指導斡旋を致して居ります。

又若し地方より上京の婦人にして單身上京せらるゝとか或は東京の事情地理に不案内等の場合は、前以て其着京時間を神田區北神保町十四番地東京基督教女子青年會事務所宛に通知して置かるれば、係員は停車場に於て之を迎へ且出來得る限りの世話を致します。

此の働は申すまでもなく多額の費用を要します、而してすべて有志の方々からの寄附金によりて支持して居るのであります。幸に東京始め各地に於ける同情の方々が、この事業の爲め經費の補助を與へて下さることが出來ますならば、これは單に本會の事業の發展の爲めばかりでなく、亦社會のために少なからぬ貢献となる所以であらうと存じます。何卒多少に拘らず寄附して下さることを懇願して止まないのであります。尙每年定期の寄附を豫約して下さる事が出來ますならば、此上ない仕合と存じます。

寄附金は本會事務所へ直接御屆戴けば結構で御座います、又御申越下さるれば早速係の者を伺はせます。

○女子英學熟女子青年會

神の御國を此地上に建設しる働きの爲、又神の敎への傳導の爲めに働くべく與へられた其一年間はもう過去の幕の中に葬られて今は最早を働きを新役員に讓るべき時となつた。その一年間を顧回すれば自分等が期待し計畫した働きの萬分の一も成就せず反つて未信者方の批評の中心となり躓となつた事を歎くのである實に暗黑時代なりし事を悲しむ其一年間か、例へ役を新役員に讓つたとはいへ我々信者の働きは終らぬ、故に今後は凡ての機會を利用して未信者の方々に直接キリストを通し生ける全能の神を認められんやう祈る次第である。去る一月廿八日（金曜日）午後三時五分より本講堂に於て總選擧を行ひし結果左の者役員に撰定せり。

會長　太田泰　　副會長　本多春美
書記　田畑幸　　會計　赤松壽
集會部委員長　宮澤操　　誘導部委員長　安村末
社交部委員長　片岡民　　販賣部委員長　石山梅
圖書係　本間愛　　高野重代

○萬國學生祈禱日

は二月二十七日なれど東京神田女子青年會館にての開催は都合により三月第一日曜日（五日）に延期せられたり。

○クラーク氏歡迎會

共勵會々長クラーク博士夫妻の來朝につき二月二十四日午後六時より神田青年會館にて歡迎會を開き基督教各團體代表の歡迎辭及ク氏の挨拶あり會衆五百餘にて頗る盛會なりし

○會友申込（本部報告）

（普通）藤浦初音　清水すみ子　金子みつ子

○會友會費領收（本部報告）

金壹圓也
井街てる子（大正四ノ十一—同五ノ十一）藤浦初音（大正　）
澤田みや子（大正四ノ十一—五ノ十）中野やす子（大正四ノ四—五ノ三）
金子みつ子（大正四ノ十二—五ノ十一）守永すゞ子（大正四ノ十一—五ノ十）
牧野柳子（大正四ノ十一—五ノ十）山本清子（大正四ノ十一—五ノ十一）
村上いつ子）大正四ノ五—五ノ四）手塚靜子（大正五ノ一—十二）
金貳圓也
佐田文代子（大正四ノ十一—五ノ十）清水すみ子（大正四ノ一—五ノ十二）
宮川幹枝（大正四ノ八—六ノ七）橋本幾代（大正四ノ五—六ノ四）
金壹圓五拾錢也
松岡琴子　大正四ノ五—五ノ十一）

○雑誌『女子青年界』代金領收

金七拾錢也
中島芳尾（大正四ノ一—四ノ十二）新みね子（大正四ノ十—五ノ九）
高津久子（大正四ノ四—五ノ三）船石磐子）大正四ノ十二—五ノ十一）
森岐みちよ（大正四ノ十二—五ノ十一）岩倉照子（大正四ノ十—五ノ九）
中原ます子（大正四ノ十—五ノ九）片岡京子（大正四ノ六—五ノ五）
前川雪代子（大正五ノ一—五ノ十二）齋藤秀子（大正四ノ六—五ノ五）
水澤ふく子（大正五ノ三—六ノ二）今井光子（大正四ノ一—四ノ十二）
望月あさ子（大正四ノ二—五ノ一）飯田（大正五ノ二—六ノ一）
金四拾貳錢也　堀口りち子（大正四ノ七—五ノ一）
七拾錢也
鈴木きよ（大正五ノ十—六ノ九）笠原あや（大正五ノ二—六ノ一）
永野むつ（大正四ノ八—五ノ七）石川貞子（大正四ノ九—五ノ八）
鶴野瑛浩（大正五ノ一—五ノ十二）松永とも（大正四ノ九—五ノ八）
内倉くら（大正四ノ五—五ノ四）星野靜枝（大正四ノ五—五ノ四）
井戸本小夏（大正四ノ三—五ノ二）
金貳圓也
和田花子（大正四ノ一—六ノ八）
金壹圓四拾錢也
野口幽香子（大正四ノ一—五ノ十二）岡崎幸子（大正三ノ六—五ノ五）
金參拾五錢也
加藤きぬ子（大正四ノ十二—五ノ五）城野みよ子（大正五ノ一—五ノ六）
村松孝德（大正五ノ一—五ノ六）
金五拾錢也　太田貞子（大正四ノ十—五ノ五）
金貳圓也　青柳みや子（大正ノ三—六ノ十）
金拾六圓貳拾四錢也　宮城女學校青年會（大正四年三、四分二十三冊及同年五—十卅一冊代）
金參圓九拾貳錢也　共立女學校青年會（大正四年十二月分五十六冊代）
金四拾貳錢也　多々良せつ子（大正四ノ八—同五ノ二）
金壹圓也　木澤勝子（大正四ノ九—同五ノ十二）
金壹圓拾貳錢也　渡邊ふみ（大正四ノ十ヨリ一年分及十二部代の幾分）
金拾六圓八拾錢也　トリストラム（大正三—五ノ一マデ十部代　大正四—五ノ一マデ十部代）
金四拾貳錢也　那須てる（大正四ノ十—五ノ三）
金壹圓三拾錢也　矢野千代（大正四ノ十一—五ノ十二部）
金七拾七錢也　貴山富士代）大正四ノ十二—五ノ一）
金參拾五錢也
山本秀（大正四ノ十—五ノ一）壹岐俊（大正六ノ二—六ノ十二）
金壹圓七拾錢也　吉田壽枝（大正三ノ十二—六ノ三）

大正五年二月廿六日印刷納本
大正五年三月一日發行

發行所　東京市神田區北神保町十四番地　日本基督教女子青年會
編輯兼發行人　東京市神田區北神保町十四番地　河井道子
印刷人　東京市芝區櫻田和泉町七番地　前川吉治郎

proportion to the reports sent out. Lists of books for Japanese girls to read were sent to two inquirers; many books for the libraries were put into the Tokyo and Yokohama Associations. Once a week in the spring and occasionally in the autumn the office secretary went to the Yokohama Association to help Miss Baker, and once took the members on a picnic. No record has been kept of the amount of correspondence done in Japanese, but in English 2464 pages of letters, reports, etc. were typed.

The National Committee does not have so direct touch with individual girls as the local Associations, but the two workers in the office have had regular Bible classes in local Associations; a few gatherings such as an alumnae meeting of Kyoritsu girls with Miss Loomis have been held at Tamachi; and for part of the year weekly evangelistic meetings were held.

This is a record of some of the very hum-drum things which go through an office, but effectual work on the part of the National Committee can not be done without the mechanical part which the office must play. So behind these details we hope that there is a much deeper meaning and that some lasting work has been made possible for others.

As we look forward much larger possibilities loom up. Hitherto the time and energies of the two national secretaries have been given largely to the Tokyo Association work. But now the Tokyo Association certainly needs no more direct supervision from the National Committee through its secretaries, and this means that the time and attention of the national secretaries can be given more largely not only to the student Associations in and outside of Tokyo, but to the organization of other city Associations. For years other cities have asked for organization and have had to be refused on account of lack of secretaries, but now even though no new secretaries were forthcoming for some time the national secretaries could do in one other city at least what they formerly did in Tokyo. The national office secretary can carry on a great deal of the ordinary work of the National Committee, and free the executive secretaries for more important matters. Besides the direct organization of other cities there are some big problems to be tackled which have been only discussed so far, such as travelers' aid work and the emigration of women to foreign countries, and these show increasingly that there is a big field for our utmost energies.

year especial attention was given in the Association hours to the work of the various committees, and this winter articles have been running in the magazine concerning the work of these committees. We are desirous of having these printed later as separate leaflets on Association work for the use of the student Associations, especially for the officers and chairmen of committees.

The magazine has a subscription list of about 1420, 100 copies of which have been sent to Japanese in foreign countries. The magazine is still running a small deficit but so far this fiscal year has very nearly paid for itself. For the benefit of foreign subscribers who wish to keep in touch with Association work an English page has been printed for nearly a year. Several girls' schools have advertised from time to time Miss Kawaguchi has shown herself very capable in the way she shouldered the resp nsibility of the magazine, for which she has done almost all the necessary work during the past ten months.

Correspondence with foreign countries has taken a great deal of time. Besides the regular correspondence with the World's Committee and the various national committees supporting secretaries in Japan, many letters have gone introducing friends to other Associations or individuals. When the Red Cross contingent went to England letters were sent to San Francisco, New York and London and the contingent was met and entertained as far as possible by Association people in all those places. Three young girls seeking their fortune in America were sent to an Association and looked after. The Japanese Association in Los Angeles wished to have a library, and books amounting to nearly one hundred yen were chosen and sent from Tokyo. A Ryokosha no Tomo (Friend of Travelers) badge was sent to the Japanese Association in San Francisco for the use of the secretary who met Japanese girls at the boats. Lantern slides showing Japanese scenes and Association pictures were made for the Canadian National Committee. Several boats touched at Yokohama with Association people bound for other lands and these people were met and shown as much as possible of Japan as well as Association work. Miss Taylor, a member of the National Board of the United States, with her mother, was here for several months, and we hope that she returned home with a fair knowledge of the needs and opportunities for the work in Japan.

In April a report of the previous year's work was printed in English and sent to foreigners in Japan. In response 56 people made or renewed contributions. In September the same report in Japanese was sent out, and about twelve people responded,—about the same

secretary of the World's Committee, and with Miss Kawai. Miss Marion Osgood, who had been in the language school for a year, resigned from the Association to be married. Miss Ruth Emerson came from the United States in September and is studying the language at present before being appointed to an Association. The national office assistant and the Yokohama assistant have both resigned and will be with us only until the end of March.

The real work of the National Committee has been handicapped a great deal because, owing to Miss Kawai's absence, Miss Macdonald's resignation, and the delay in the appointment of her successor, there have been only two people to do the work of headquarters, and the accomplishments of the past few months are not startling.

During the year of 1915 four new student Associations were affiliated with the National Committee, making a total of twenty-four Associations with a membership of 2,673. Besides these affiliated Associations the Kawamata Rest Rooms for factory girls were opened by a former Yokohama member who keeps in touch with our national organization. The office has been trying to keep in closer touch with the student Associations. At the suggestion of the finance committee and after preliminary work at the summer conference, the Associations were asked to contribute twenty percent of their membership dues to the general work of the National Committee, and they have responded well to this request, besides making a contribution towards the salary of the Japanese national secretary. At the time of the World's Week of Prayer they also took a special collection for the world's work. The latest reports show that there have been fifty-one voluntary Bible classes with an enrollment of 553; six mission study classes enrolling 208; over Yen 300 was given for missionary and philanthropic purposes; and at least one hundred girls were helping in twenty-six Sunday schools, while several Associations were doing real social service in telephone offices, factories and electric companies; more than one hundred eighty Association members had been baptized.

The Summer Conference was held as usual, Miss Okonogi and Miss Hoshino being the leaders. 184 people were present, of whom 143 were regular delegates. 19 non-Christians were present. Of the 23 Associations belonging to the national Association 19 were represented. Girls from 34 schools were present, six of these schools being government, seven private but not mission. The Conference ended with a deficit of nearly Yen 100. It is hoped that we shall come to the day when the conference can pay its own expenses. At the conference last

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(Joshi Seinen Kai)

VOLUME XIII | MARCH, 1916 | NUMBER 3

The past year marks the beginning of the second decade of Young Women's Christian Association work in Japan, and there are many definite circumstances to record which will affect greatly the future work. One is the resignation of Miss Macdonald, who for ten years was the national secretary. To her untiring zeal and efforts is due the marked growth and development of the work. She has seen it through the pioneer stage and has won many friends for the Association. It is a great loss that she has left us, but although it seems almost impossible to go ahead without her it certainly would be no credit to her work if we did not successfully build on the foundations she has laid. Another circumstance which marks an epoch is the coming of Miss Kawai into full secretaryship of the national Association. For the past three years she has given part of her time to teaching but on her return from New York her whole energies will be given to the executive work of the Association. Miss Taka Kato has come into the work as general secretary with Miss Page of the Tokyo city Association. This means a great step in advance, for the work in Japan will become thorough and permanent in proportion to the number of capable, well-trained Japanese secretaries who undertake it. A fourth epoch-making circumstance is the completion of the Tokyo city Association building which is a tangible witness to Japanese people to the reality of the Association movement. Many new Association friends can be credited to this building. The work in Yokohama shows such promise that the National Committee, when asking recently for new secretaries for Japan, included a second secretary for Yokohama to help Miss Baker. Our friend, Rev. E. Rothesay Miller, who died last summer, left to the Association Corporation his property here in Tokyo, to be used for the benefit of girl students in Tokyo. This means a gift of something like Yen 20,000 for use when the time comes for some new large undertaking in the Tokyo work.

Several changes have taken place during the year. Miss Matthew who for five years was general secretary of the Tokyo Association has been appointed national secretary to act with Miss Kawai. Just now she is in the United States for consultation with Miss Clarissa Spencer-

院長診察　月、金、木、午前及木午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤

東京市麴町區三番町三十番地（市ヶ谷見附内）

電話番町六二一番　**東洋内科醫院**

院長　醫學博士　**高田畊安**

電話ちがさき二番　**南湖院**

神奈川縣茅ヶ崎海濱（従停車場半里）

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

院長診察　土曜日午後　入院診後應需

AMERICAN BIBLE SOCIETY

TELEGRAPHIC ADDRESS "BIBLES YOKOHAMA"

□新刊□

「福音書に現はれたる耶蘇基督」

壹部　定價金拾錢（菊版半截二五八頁）

右の小冊子は書名の通り新約全書、四福音書中に記載されたる耶蘇基督の御生涯に關する記事を其の儘に適當に拔萃し編纂したものでありますから四福音書中の耶蘇基督傳を簡易にお讀みになるに御都合も宜敷からうかと存じられます。求道者の方々の爲め其他傳道用にお使ひ下されたう御座います

□聖書定價目錄御申越次第進呈

各國語聖書發賣所

横濱市山下町五十三番

米國聖書會社

振替貯金口座　東京　壹八四壹〇番

女子青年界第拾參卷第參號

大正五年二月廿六日印刷納本　大正五年三月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可